
魔王と神と天空の城

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と神と天空の城

【Nコード】

N7171W

【作者名】

メア

【あらすじ】

神に殺されたかどうかはわからないが、神様から嫁付きチートを頂いて転生しました。転生先はゼロの使い魔。始めに嫁を調教・・・
・・・もとい、教育せねばなりません、がんばります。

これはカンピオーネの一部キャラが嫁です。無理矢理従えるとか原作崩壊（そもそも、作者が二次創作やWikiしか知らない）やキ

ヤラ壊れが許せる人だけ見てください。

プロローグ（前書き）

書きたくなつたから書いてみた。

プロローグ

ここは何処だろう？真っ白な空間だけ。確か、小説を読んでいたから急に力が抜けたんだよね？

「パンパカパ〜ン」

「うん、夢だな」

「嫌、夢じゃないから」

目の前にくす玉をもった白い爺。そして、手には小説。

「あんだ誰？」

「神じゃ」

「自称神は転生しろと？」

「自称じゃないわ！ まあ、その通りじゃ」

まさか、本当に転生とはな。さて、どうしてくれようか？別に戻る気もないし構わないがな。

「で、何処の世界よ？」

「ゼロ」

「コードギアス？」

「いや、ゼロ魔の世界じゃ」

「やだ。確か死亡フラグ満載じゃん。しかも、原作知らないし」

「コードギアスもそうだけどな。あつちにはギアス次第だしガンダムとかナイトフレームとか乗りたいからな。」

「そう言うな。特典も用意してあげるからさ？」

「何個？」

「三個」

「少ない」

「えっ、多いじゃろ！」

「良く考える。どうせ不死とかは出来ないんだろ？」

「うむ」

「だから、もっとくれ」

「だって三つって低いだろ？」

「そうじゃな……まけて四個じゃな」

「不死や不老意外ならなんでもいい？」

「うむ、良いぞ」

よし、言質とつた！

「カンピオーネって知ってるか？」

「まさかつ！？」

気付いたか。そう、一番の狙いはなんでもいいという言葉が欲しかったんだ。

「最強の鋼と言われるアーサー王の権能を全て使える神殺しにしろ。これはアーサー王を殺して手に入れるんだから一つだろ？」

「くっ、無理じゃ。発現するかは本人しだいじゃからな」

「なら、二つめで全て発動するように呪力など徹底的に強化しろ」

「良かるう」

後二つかな？後、一つは神だな。アテナでもいつとく？

「三つめはフレイヤの権能だな」

「これもか？もう、勘弁して欲しいのじゃが……」

「四つめは……アテナを下さい」

「はっ?」

「アテナを下さい。アテナを下さい」

「いや、聞こえたが……」

「あつ、もちろんまつろわぬ神状態のアテナな」

アテナは好きだぞ?カンピオーネで一番気に入っている。

「いやいや、一番最後のが一番無茶じゃから!他はワイロを色々送ればどうにかなるんじゃないが……」

「うむ、良いぞ」

「……」

「うむ、良いぞ」

「わかった。ただし、どうなっても知らんぞ!」

七色の声帯で真似てリピートしたら落ちたな。くっく。

「では、とっとと行け。アテナは後で届ける」

「了解」

「そして、ハルケギニアに降り立つ新たな神殺しよ……二度とくんなっ!」

「あはははー！」

そして、俺は落とされた。ちなみに、俺の職業はマジシャン兼詐欺師兼怪盗だ。

一話

まじで転生しましたよ。今は赤ん坊だな。

「陛下、殿下、双子の可愛らしいお子さんですよ!」

「ということはおとつともつとだね」

「はい」

双子か……待て、まさか……なんか奥底から身体
の力が沸いて来るぞ？

隣を見ると、怒り狂い馬鹿げた力を向けて来る赤ん坊が隣に寝てい
る。しかも、力を放ってるのはこっちだけだ。

「おぎゃあ、おぎゃあ（貴女が妾をこんなのにした元凶か。護堂に
殺されて気付けばこのような……神の力は有るようだか
ならば……）」

「おぎゃあおぎゃあ（取りあえず、五歳くらいまで休戦しないか？
その後、決着をつけようぜ?）」

「こく（良かるっ）」

さすがに、動けないしな。お互いこの状態で暴れられないのは理解しているしな。

「さて、男はアルカイド。女はアテナだ」

「素敵な名前ですね」

「ぼくはウェールズ。これからよろしくね。アルカイド、アテナ」

「（断る）」

こうして、ハルケギニアに転生をはたした。

三歳の時、俺とアテナは言葉と読み書きを覚えた。神殺しと神はだてじゃない。

後、俺達は平民の妾の子供だったらしくアルビオンの王宮から追い出され、王家直轄地の一つの浮き島（結構広い）を与えられた。むろん、俺とアテナは興味無しなんだが母親は日に日に蠢れていた。そんなのを無視して俺達は外で本ばかり読んでいる。

「アテナ、ここでは杖の契約しないといけならしいよ？」

「必要なのですか？」

「興味あるんだけどな」

「取りあえず、止めて力を与えようか」

「はい、無駄ですからね」

今度はちゃんと豊饒の女神たる権能を使い土地に力を与える。

「竜脈を創りました」

「こっちは金山とか緑だな」

ココココココココココココココココココココココココココココココ
ココココココココココココココココココココココココココココココ

「やり過ぎた（ましたね）」

外は大変な事になっている。急に緑が生えて来て、巨大な世界樹が出来ていた。

「天空の城をイメージしたのがいけなかったのだな」

「まあ、気にしない」

俺達のいる領地は美味しい果実が手に入るようになった。といっても後二年で崩壊するかもだけどな。

そしてやってきました五歳です。ちなみに、母親は一年前に無くなりました。王家の方からは何もありません。ウェールズ兄さんが個人的に送ってきた限りだ。

ちなみに、領地は代官がやって来て好き勝手してる。俺達が子供だと思ってる。特に許せ無なのがアテナに色目を使いだした変態ってところだな。アテナは俺のモノなのにな。

アテナの容姿は肩の辺りまでのびた銀の髪は、月の光を溶かし込んだかのように淡く輝き、瞳は闇夜そのものごとく黒いし、天使のような可憐な顔だちをしている。俺は銀の髪に金の瞳だ。

「さて、準備は良いか神殺しよ？」

「ああ」

そうです。アテナとの対決です。これは外せないよな。場所はロマリア皇国上空だ。

「妾はアテナ。ゼウスの娘にして、そこを越え行く者。

妾は謡おう、三位一体を為す女神の歌を。天と地と闇をつなぐ、輪廻の智慧を。

妾は謡おう、貶られた女神の唄を。忌むべき蛇として討たれた女王の嘆きを。」

ちよっ、この詠唱は本気じゃねえか！

「妾は謡おう、引き裂かれた女神の詩を。至高の父に凌辱された慈母の屈辱を。

我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女。されど、かつては命育む地の大母なり！ かつては闇を束ねし冥府の主なり！ かつては天の叡智を知る女王なり！ ここに誓う、アテナは再び古きアテナとならん！」

この詠唱が進むにつれて、アテナの姿が変わって行く。背が伸びて、すつきりと手足も伸びきり、可憐な幼女の背格好から可憐な少女へ。面差しは変わらず天使のような可憐な顔立ち。外見は14歳くらいかな。着衣は古風な白い長衣となっていた。

「可愛いぞアテナ」

「なに？」

しばらく、自信の格好を見ている。

「何故だ！何故小さいままなのだ！」

本来なら17歳くらいになるはずなんだが、たりなかつたな。

「まあ、いいじゃん」

「仕方ないな」

「勝った方が好きにできるでいいな？」

「うむ、では殺し合おうか」

こうして、五歳にしてまつろわぬアテナとの戦いを始めた。

始めにアテナが闇の領域を展開した。昼間なのに半径10キロくらいが一切の光が無い世界へと変貌した。

「来たれ我が眷属よ」

アテナの後ろに大量の光る金の眼が現れた。

「我はヴァルハラヴァルキュリアの支配者なり、顕現せよ戦乙女！」

「なんだと……」

フクロウに対して呼び出したのは、光り輝き純白の翼を持つ美しい女性達の軍団。

「行け！」

ヴァルキュリア戦乙女の相手になるわけもなく、闇の領域であるのに、ヴァルキュリア戦乙女から放たれた多数の光弾や光りの槍はフクロウを惨殺していく。

「くっ、竜よ来たれ！」

今度は竜か。出て来たのは東洋の龍が二五匹だ。膨大な呪力を使つてやがるな。

「我が名はアルカイド、勝利を導く軍神なり！ヴァルキュリア戦乙女よ奮起し我に勝利をもたらせ！」

最強の鋼の軍神たる色々混じったアーサーの権能とフレイヤの戦女神としての権能を同時に使用する。

「くっ！」

頭が痛い、我慢する。三つの権能を同時に使用するのは無茶か。

しかし、龍達は光速で接近した戦乙女達の槍により串刺しにされ死に絶える。

「やはり、神殺し……並の手段では勝てぬな」

アテナは黒き鎌を取り出し一閃。それだけで、数人の戦乙女が消滅した。

「妾は冬を招き、死を振り撒く者。冷たい冥府の支配者。刈り取り、奪い取る略奪の女王。その妾が命ずる。死せる王となり、骸をさらせ！」

アテナが展開した闇に触れたモノはことごとく死んで行く。神殺したる自身は大丈夫だが、下のロマリアや領地もかなりやばいぞ？

「くそつ、こうなりややってやる！」

アーサー王の権能で一番強いのはエクスカリバーだろう。しかし、剣は無い。しかし、最強の鋼たる理由は何も剣だけでは無い。

「我は神殺しにして終末に現れる最強の鋼より権能を篡奪した者なり、故に我が身は最強の鋼なり！」

「反則では無いか！」

光り輝くオーラを纏い、自身を一時的に最強の鋼と同じ戦闘能力を得る。

アテナの放った黒き鎌の一撃を素手で叩き割る。

「くっ」

アテナが黒耀石のような者を作り出そうとしている。

「させるか！我は竜を殺す鋼に力を与えた者なり、故に我はその力を行使する！」

「ランスロットだ………っ！」

アテナにラッシュを決めていく。容赦はしない。あの黒耀石の奴は問答無用で殺されるやばい奴だから！

「がはっ」

アテナの身体がくの字になってもやめない。全力でガントリングのように乱打を決める。妹にする事じゃねえな。

しばらくして、アテナが元に戻ったので止めて、創りだした黒耀石を奪い取り首筋に宛てる。

「俺の勝ちだアテナ」

「くっ、致し方ない。殺せ」

「イ・ヤ・ダ」

「………何をする」

アテナを抱き抱え、死の荒野となった領地の一部とロマリアから館に戻る。

館は死体だらけだな。後で処理するか。三日後には俺とアテナ付きのメイド達が帰って来る。当然、逃がしてましたとも。

さて、ベットに寝かせたアテナの横に座り話しをする。

「アテナ、勝った方が好きにするっていったよな？」

「だから、殺して権能を奪うのであろう？」

カンピオーネの世界ならそうだな。でも、ここは世界が違うからな？

「まさか、護堂のように見逃すと？」

「まさか、俺が欲しいのはお前自身だ」

「なっ／＼／」

「と、言うわけで契約により、アテナを俺の者にする！」

「やめろっ、妾を凌辱する気か!？」

アテナは可愛いし、誰にもわたさん。それに身体に教え込んでやる。

「うむ!」

「正気か？」

「当たり前。それに神では普通だろ？」

「……………貴様しだいだ……………」

「いただきます！」

「くっ！？」

それから、アテナをたっぷり調教……………もとい、教育した。

アテナをちょ……………教育したんだがさすが女神だ。2年もかかったぞ。

「お兄ちゃん、ロマリアの被害が数千人だって」

「あははは、派手にやったな」

今では俺をお兄ちゃんと慕ってくれている。まあ、実際は途中から快樂欲しさにわざと反抗したりもしてたし、本人も一緒にいるのは結構楽しかったのでよかったらしい。ただ、神と神殺しとしてや、最初に無理矢理連れて来られたりしたのがかなり御立腹だったみたい。

「というか、どうせしばらく死んだままだったのだからかまわない」

「ランスロットと対決にあたり護堂と組んで戦ったけど、死んじやったもんね」

「そのおかげもあり、お兄ちゃんを受け入れたのですけどね」

「アテナお嬢様。代官様がお呼びです」

ふむ、しぶとく生き残り私腹を肥やしていたがアテナにちょっとかいをかけて来たか。そろそろ潮時かな。

「どうする？」

「領地経営のノウハウは？」

「叡智の神に何を言っている？」

「ごもつとも。なら、心筋梗塞でお亡くなりになるだな」

「わかった」

そして、派遣された代官はお亡くなりになった。次の派遣は断った。自分達で勝手にするからとね。さーて、天空の城に改造するぞ！と。その前に杖の契約だな。だって何もしてないもん。権能あるし、必要無いだろ。ああ、異端審問もあるか……。面倒だな。虚無と偽ればいいや。権能は充分、虚無と偽れます。一応、始祖の血統だしな。

一話（後書き）

ウェールズさんの苗字ってあれだけ？ド・アルビオンとかつかないのかな？

一話（前書き）

領民を手に入れます

一話

こんにちは、アテナとイチヤイチャしているアルカイドだ。早速ですが、問題発生だぞ。問題とは……そして、誰もいなくなっただ。

「みんな死んでしまった」

「あゝ出力間違えたか」

「うん、ろくな連中にはいなかったけど」

メイドもないし、二人だけかな。まあ、好き勝手にできるか。

「どうする？」

「まずやる事は、死体の処理と領地の把握だな。死体は戦乙女ヴァルキユリアであるから、領地の把握はフクロウで頼む。ついでに各地に派遣してくれてもいい」

「優秀な人材を探すのか。わかった」

こんな事に使うのはどうかと思うが、使える物は何でも使うぞ。

アテナが数万羽にもなるフクロウを召喚し、密偵として世界中に放

つた。こっちは戦乙女ヴァルキュリアを100人ほど召喚し、死体の処理及び警備をさせる。

「お兄ちゃん、ウエールズから手紙が届いているよ」

「何々……現状を報告しろだと？ 疫病でみんな死んだけど、アテナと二人で病原菌（代官達）は駆逐出来たので心配ありません。これから二人で領地経営します。勝手に難民とか受け入れても問題無いよね？ とこんな感じでいいや」

「ん、フクロウに届けさせよう」

「お願い」

「では、本格的に祝福をあげましょう」

「ああ」

枯れ気味な世界樹に二人の膨大呪力（魔力）を与えて活性化させる。龍脈と合わせて世界樹と龍脈が作り出す力を領地内に循環させる事で土地の力を永続的に増やす。これにより、再度荒野に戻りかけていた大地は息を吹き返す。

「ふう、休憩にしましょう」

「お茶を……メイドもないんだった……」

「私が煎れますね」

「お願い」

アテナが……女神が煎れるお茶ってかなり贅沢だよな。
よし、仕事するかな。

取りあえず、領地内の至る所に純度100%の金山を作り出す。まあ、フレイヤの金を作り出す権能だけだな。後は、代官が売っていた金の販売ルートを探すとするか。

しばらくして、手に怪我をしたアテナが戻ってきた……何故に怪我をする？というか、不器用なのか？

「お兄ちゃん、出来た」

「ありがとう。怪我は平気か？」

「うん／＼／」

デレるようになったアテナの照れ顔は天使のように素晴らしい。思わず、膝の上に乗せてしまう。

「お兄ちゃん？」

「ああ、美味しいよ」

紅茶なんだが……今まで飲んだ事がない程美味い。葉っぱから自作したようだ。普通の紅茶がただの水のように感じてしまう。

「よかった……」

そろから、しばらくまったり過ごした後、仕事を行う。

ヴァルキュリア
戦乙女達には金の採掘をさせて、アテナは果実や植物を品種改良している。ヴァルキュリア 俺は身体に戦乙女を宿して空を飛び、領地を区画事に更地にしたりなどして整理する。その後は設計図を書いていく。不眠で行うので作業が捗る。

さて、ここでカンピオーネについて説明しておこう。

カンピオーネとは、神を殺してその力（「権能」と称される）を篡奪した者の総称である。「エピメテウスの落とし子」「魔王」などとも呼ばれる。高い身体能力と怪我からの回復力、そして経口摂取などの特殊な方法でもない限り己にかかる魔術や呪術を一切受け付けない体質を持ち、並の人間や魔術師では抗うこともできないとされる。また高い言語習得能力・フクロウ並みに夜目が利く・人間離れた直感力・真剣勝負になると体の状態が勝手に最良に近づいていくなどの体質も併せ持つ。

カンピオーネの義務は「まつろわぬ神が現れた場合、人類代表として戦うこと」のみ。その義務さえ果たせば何をしても許されるといふ暗黙の了解があり、カンピオーネは大抵自己中心的な考えを持っている。

カンピオーネが神を倒した場合にも権能を篡奪する事が可能だが、「神殺しの母パンドラを満足させ、己の養子に迎え入れたいと思わせる勝利」を得なければならず、正々堂々の一騎打ちでなくとも相應の戦いぶりを見せる必要がある（例として変態騎士はパンドラから「弱った神様を狙って倒しても権能は増やさない」と釘を刺されており、実際ペルセウスを倒しても変態騎士の権能は増えなかった）

これがカンピオーネだ。ちなみに、カンピオーネはイタリア語でチャンピオン。次はまつろわぬ神アテナ達について。

人の紡いだ神話に背いて自俣に流離い、その先々で人々に災いをもたらす神々。基本的にカンピオーネ以外には抵抗することもできないが、奇跡的にただの人間がこの神々を殺せた場合、その者はカンピオーネとなる。

なお「殺す」とは言うものの、そのベースが神話である以上一度殺した神が復活する可能性はゼロではないらしい。

まつろわぬ神の出現には『原則』が存在し、神の降臨の際には、降臨時の地上の神話をベースに肉体と精神を形成される。そのため、同じ神でも降臨した時代の伝承の内容が変わることによって神の性質が代わり、既に失われた神話の神が長い時間まつろわぬ神として過ごすことによって現代に現れることもある。

さて、不眠で行ける理由は真剣勝負になると身体が勝手に最善の状態になるというのを利用している。それは、神と神殺しは出会うとほぼ自動的にベースの状態になるからだ。もちろん、意識的に切る事は出来るがオススメ出来ない。

領地経営に乗り出して一ヶ月。金の販売により10万エキューを手に入れた。1エキューは日本円にして1000円だから1億円に相当する。

そして、いい加減二人ではしんどいので人を入れる事にした。

「アテナ、どんな連中がいいかな？」

「土メイジでしょう。それも最低でライン、普通でトライアングルですね」

メイジは基本的に四系統魔法を使う。四系統魔法とは、メイジが用いる魔法で、火、水、風、土の4系統がある。各メイジはいずれか一つの系統を得意とし、その系統の使い手と呼ばれる。魔法の熟達により複数の系統を使いこなすことも出来る。同時に系統が増えるにつれドット（1系統のみ）、ライン（2系統、又は1系統の2乗）、トライアングル（3系統、又は1 2系統の3乗）、スクウエア（4系統全て、または1 3系統の4乗）の使い手と呼ばれる。複数の系統を組み合わせる初めて使える魔法も存在するらしい。俺達は契約すらしていないのでドットですら無い。

「んゝ年齢は問わないから適当に引き抜くとするかな」

「そうですね。後はメイドや領民も増やさなくてはいけませんね」

「ぶっちゃけ、税は三割でいいしな」

確かハルケギニアの平民の税は6ゝ7割だったはずだからな。

「では、声をかけてみますね」

こうして人材を探す事にした。アテナのフクロウに負けないためにフレイヤの眷属である猫達を召喚してハルケギニアに解き放った。

三人称Side

街道を急スピードで走る馬車が一台。その後ろからは翼が生えた蜥蜴のような……俗に言う野生のワイバーンの群れに追われていた。

「くそつ、いつたいなんだよ!」

「いいから早く逃げろ!せつかくの商品が台無しだぞ!」

しかし、いくら頑張ろうと地を行く馬車と空を翔るワイバーンでは始めから勝負がついている。

「切り離して囷にするぞ」

「くそつ、仕方ねえ!」

馬車についていた荷台を取り外し、速度を上げる馬車。荷台は地面に転がり多数の悲鳴が聞こえた。

そこにあつたの鉄格子……牢屋だ。中には多数の若い女性や男性、子供が手足を拘束されていた。その人達の顔には恐怖や絶望が写し出されている。

「GYAAAAAAAAA!」

多数のワイバーンが牢屋に噛み付き、鉄格子を破壊しようとしている。

「……………」

その中で三人だけ静かな者達がいた。その三人は少女と女性、男性だった。どうやら親子のようだ。女性の二人は青い髪に緑の瞳。男性は金髪に赤い瞳。そんな親子の近くに一匹のフクロウと猫が現れた。普通はワイバーンを恐れて近づく事は無い。ワイバーン達もまるでいない様に扱っている。

「何かな？」

「さあ？」

「不思議だな。このような生物はハルケギニアにいたか？」

猫とフクロウは不思議な声を全包围に発した。

「助けて欲しくば我等と契約せよ（にゃ）」

「えっ？」

「喋った!？」

「契約内容は？」

殆どの人が驚く中、親子の男性は契約内容を確認する程、冷静だった。親子は使い魔だと思ったのだろう。実際に言葉を話せるように

なるルーンも存在している。

「我等が主達の領民となり、主達に従え。特典は、最初は衣食住を保障し、戦争時以外は税金一律三割。土メイジがいるなら優遇することじゃ」

「いいでしょう」

「母さん？」

「お前達はどつする？」

親子は早々に決めて他の人達を促した。

「衣食住の保障か……」

「しかし、税率が三割か……しかし、裏があるのでは？」

「しかし、奴隷にされた私達に自由は無い。それに、このままだとワイバーンに食べられるだけよ？」

「……（こく）」

女性の説得により彼等は決意したようだ。それを感じたフクロウは主を呼び出した。

フクロウが光り輝くと、そこに一人の少女が顕現した。

「喚ばれて飛び出てじゃじゃん？」

小首を傾げつつ変な事を口走る少女がいた。

「「「「「」」」」」」

「お兄ちゃん、受けてないよ?」

「「「「「」」」」」」

「あう／＼／」

どうやらアルカイドの入れ知恵のようだ。いくら丸くなったとはいえアテナがやるはずの無い事だから当然だ。

「可愛いからいいじゃないか。それより、ワイバーンなら確保してくれ」

「わかりました。貴様等、妾に従え」

少女の雰囲気ガラリと変わり、神々しい気配を放つ。そして、威厳ある声を発すると、牢屋を破壊しようとしていたワイバーン達は頭を足れ忠誠を誓った。アテナは竜の神とも言える存在故に全ての竜は彼女に従う。従わないのは余程忠誠心がある存在だけだろう。

「スゲー」

「群れも全て連れて来なさい」

「GRU」

命令に従い仲間を呼ぶワイバーン。アテナは次の仕事を行う。

「さて、貴様等はこれ運べ」

残りのワイバーンに牢屋を持たせ領地へと運んだ。

三人称 Side Out

三話

アテナが連れてきた人達には館で生活してもらおう。というのも、家は全て壊して区画整理をしやすいからな。

とりあえず、料理が出来る人に食材は好きに使って炊き出しを作って貰った。出て来た料理はシチューのような物だった。

「久しぶりにまともなご飯だ！」

「今まで何を食べてたんですか……」

青い髪と同じくらいの少女が食事を持って来てくれた。

「「果実」」

「「……」」

あれだ、神たるアテナは食べなくてもいいし、身体は常にベストコンディションに整えられるカンピオーネも本当は食べなくても生きようと思えば生きられる。でも、やっぱり食事は食べる。心を育むらしいしね。アテナは俺に付き合ってくれる。

さて、食事が終わったのでお仕事だ。お代わりとかしてまだ食べている人もいるけど気にしない。

「食べながらでもいいから聴けよ」

皆（30人くらい）がこちらを見る。ちなみに、他にも連れてきたよ。犯罪者じゃなくて、税金が払えなくて夜逃げしようとしてた奴や娘を取られた人達（救い出した）とか色々な人達だ。

「まず、魔法が使える人はいるか？」

「んっ」

「はい」

さっきの親子と……全部で六人か。五分の一と考えたら大いな。

「ランクと系統は？」

「私は火のライン」

「俺は風のトライアングル」

「僕は水のトライアングル」

くっ、欲しいのは土なんだけどな。風は伐採に使えるし、水は秘薬を作れるな。火は工場に使えるけどな。

「火のスクウェアだ」

おお、トップだぞ！さすが強そうな親子！

「私は水のスクウェア、土のトライアングル」

キター！しかも、水はスクウェアだと！娘も期待だ！

「えっと、土火水共にラインです」

将来の期待大だな。可愛いし、側に置こう。可愛いは正義だろ？

「わかった。じゃあ土が使える二人は悪いけど皆の家を作って」

「わかったわ」

「はい！」

「風の方は木の伐採を頼む」

「はい！」

「火の人はやること無いや。レビテーションで荷物運び。水の人
は何かあれば治療してあげて。杖はここから適当に選んで」

多数の杖を渡してやる。もちろん前にいた連中の物じゃない。作つた奴だ。材料は世界樹の枝に女神の祝福付き。成長しやすいように増幅機能もいろいろついでる。

「あつ、平民とか貴族とか関係なくお互い助け合つように。後、亜人もいるけど差別とかは許さないからな。ちなみに、君達は言霊で縛ってあるから外部に漏らすことも出来ない」

神や神殺しが発する言霊には、強制力がかなり強い。

みんな納得したようで宜しい。法律なども教えたし、アテナが平民を技術者事に分けたから問題無い。

それから、各自別れた。

水のスクウェア・土のトライアングルメイジはブレンヒルト・クレスメントと言うらしい。夫がジークフリート・クレスメント。娘がフィル・クレスメントだって。

今は娘と一緒に住宅予定地に一戸建ての4〜8LDKの家を次々と作って貰っている。

「きついわね」

「大変です」

「精神力がやばいならこれ食べてね」

黄色い果実。世界樹の実とゆわれる精神力を全快にしてくれる優れたものだ。別名禁断の果実だがな。

「美味しいわ」

「ちゃんと回復してます……」

「やるわよ」

「はい」

「コイル・アース・デル、練金！」

それからも、頑張つて働いてもらう。ある程度、住宅が出来たら工場（製鉄所など）を作つて貰つた。ジークフリート達に金を熔かして貰い職人達が加工していく。必要な材料は金に糸目を付けずに揃えた。

そんなことをしていると早六ヶ月。ウエールズに土メイジを借りて港（飛空艇のドックなど）と街（工業区など）を整備して、館を城に作り替えた。まあ、ラピユタなだけだね。更に、住民は増えていき1000人を超えた。平民からも優秀な人材は登用し、引き抜きも行った。トリステインやガリア、ゲルマニアから……アルビオンからも少しな。

「さて、アルカイド様、アテナ様。杖の契約は終わりましたか？」

「うん」

今はブレンヒルトさんに魔法を教わる事になりました。ブレンヒルト達には虚無と偽つて権能を教えたら、四系統魔法もやってみると言われたので教わる事になった。

「では、杖の先に光が灯るようにイメージしてライト」

ブレンヒルトさんの杖の先に光の塊が出現した。

「では、二人共どうぞ」

「「ライト」」

辺り一面が真っ白になった。

「魔力を込めすぎです」

「少ししか入れて無いんだけど」

「私達の呪力は膨大ですから」

神殺しの魔王とまつろわぬ神だからな。

その後、練習してどうにかコモンスペルをマスターした。フライは魔力込めれば馬鹿みたいな速度がでる。お互いに魔術の神でもあるからな。俺は神殺しだけどな。

「アルカイド様、朝ですよ。起きてください」

「ああ、おはようフィル」

フィルは俺専属にして、寝食共にしてる。無論、夜のご奉仕もさせている。フィルも最初は嫌がったが直ぐに諦めた。この世界では普通みたいだ。まあ、フィルはかなり優遇してるけどね。

「ほら、起きろアテナ」

「おはようお兄ちゃん、フィル」

猫のように眼を擦りながら、眼を覚ますアテナ。その天使のような

可愛いさにキスをして、押し倒してしまう。

「アルカイド……………」

フィルが呆れている。その証拠に様子が外れている。

「ほら、フィルも来い」

「……………はい」

それから、1時間。二人と遊んだ。無論、食事は暖かい。だってフィルはこれを予想して早めに起こすからね。

朝食後は、訓練所で三人仲良くブレンヒルトさんから魔法を習う。ちなみに、訓練所の横には実験所がある。ここ天空の城は多段構造になっている。上層は城と街がある。街はヴェネチアをイメージして作った。街の郊外に訓練所と実験所がある。工場などは研究所の下、中層に作られている。

「さて、今日は四系統魔法よ。フィルは復習をしないさい」

「はい」

俺達は、ブレンヒルトさんから教わる。

「まずはどの系統が得意か調べましょう。ウル・カーノ、発火」

ブレンヒルトさんの杖の先に、ライターで出来たような火が現れた。

「おー」

「ウル・カーノ……出来た」

それから四系統を全て調べたんだが、全部出来た。

「どの系統も得意ね。貴方達は始祖の再来じゃないかしら？」

「その程度と一緒にしないで」

「アテナ、本当の事だけどブリミル教がうるさいからさ」

「ゴミは排除すればいいじゃないですか」

「敵対したら排除しよう」

アテナの意見には賛成だ。汚物は消毒だよな？

「貴方達、外では気をつけてね？」

「はい」

それから、多少訓練して帰った。これからはブレンヒルトは別の仕事だ。

次の日、三人で魔法の訓練をしているとドットからラインに上がった。

「なんですか、その出鱈目な速さは……………」

「神の力」

「……………ぐすっ」

「……………」

どうするとアテナとアイコンタクトを行い、決定する。

「フィルに力を上げよう」

「えっ？」

「俺からは戦乙女ヴァルキュリアの力を」

「妾からは魔法の力を」

フィルに戦乙女ヴァルキュリアを宿らせ融合させ、そこにアテナが知識を与え祝福をかける。

「何を、んっ」

口づけを交わして完了。

「凄く沢山の力が沸いて来ます……………」

「これでいいでしょう」

「うん、後は俺達の正体を教えておこっ」

神と神殺しについてフィルに教えると簡単に納得した。ブレンヒルトは既におかしいと気付いていたらしい。流石だな。

それから、俺達は魔法の訓練がてら天空の城アーク（名付けた。領地名も変更した）の外壁をヒイロノカネやミスリルに作り替える作業を開始した。もちろん、固定化もかけるしカウンターもしかけた。まあ、ミスリル自体に反射があるんだけどな。

一週間で完成した。そして、俺達三人はトライアングルになった。流石魔王と神だぜ、速さがハンパない。

さて、前々からやりたかった事があるので王城にある研究所に来た。ここは、俺達の個人用だ。

「何をするんですか？」

「ふっ、ふふ。じじゃーん！」

「銃ですか？」

「ああ、これを改造する！」
フィルが呆れている。

「弱いですよ？」

「任せろ！」

「わかりました」

それは諦めてるよな？理解じゃなくて諦めてるよな！やってやる。

「とりあえず分解だ」

「はい」

分解して構造を把握した。バレルはただの筒だな。螺旋を入れてライフルと同じにする。無論、弾も改造する。

「さて、引きがねはバネを使って……あつ、そこは上から排出するから」

三日ほどで完成した。マスケットじゃないよ？スナイパーライフルだよ。射程は1キロだった。

「凄いですね……」

「まだまだ改良するぞ！」

弾丸と薬莖を作り、遠見のマジックアイテムを作ってスコープを作る。さらに、撃鉄の部分に爆発はまずいから反発を利用して……
・ああ、レールガンでいいのか。バレル自信に放電させ螺旋状に回転して発射するようにすれば良いんだ。バレルが普通のじゃ持たないな。ミスリルを使うか。連射が効くようにマガジンも用意しよう。

「フィル、やるぞ」

「はいっ！」

それから、アテナも加わり三人一緒に魔法式アンチマテリアルレールガンを作り上げた。威力は極悪で火と水のスクウェアの防御を問答無用に打ち壊した。

「なんだこれ！」

「最強のメイジ殺しでしょうね」

「暗殺にもっこい」

射程は約3リーグ（キロ）で弾数は6発。威力は金すら打ち砕く。弾丸は鉄を使用しているけどね。金なら更に強くなるだろう。

「よし、名前は殲滅者^{ディザスター}だ」

「「お」」

「あつ、魔法弾を作ってみた」

アテナから渡されたのはファイヤー・ストームが入っている。火火風かな。発動地点に高温の炎を……ぶっちゃけナパーム弾だな。ゼリーの代わりに魔法だけだな。

「ライフルは量産するか」

「止めておきましょう。強すぎます」

「ん〜平民に装備させたいんだけどな……よし、特務部隊は作る気だったから連中に装備させよう。裏切らないし裏切れないように呪いをかければいいだろう」

「それなら……」

「じゃあ、早めに見繕う」

「頼む」

人材探しはアテナの仕事だ。まあ、既に大量の白竜とか黒竜を作り出してるがな。

「んじゃ、よろしく」

「わかった。フィルは手伝って」

「何するんだ？」

「秘密」

まあ、いいや。そういえばそろそろ誕生日だな。プレゼントどうしようかな。指輪はまだ早いしな。ああ、アレにしよう。やっぱり似合ってたしな。よし、ついでだから特殊繊維でも開発するかな。

三話（後書き）

城はアークで決定。名字どうするか悩み中。

感想設定を変更しました。ユーザー以外からもいけるようにしました。

四話（前書き）

ウェールズとジエームズが間違ってた！直しました。

四話

あれから、一週間がたった。誕生日プレゼントも大切だが、領地経営も大事だ。だから、ミシンや街灯、軍艦（超電磁砲搭載型）の設計図を渡した。施設は新しく寺子屋（子供全員参加）、銭湯（温泉）、軍事施設（管制室や竜騎兵訓練所、軍事基地）なども作った。アテナから頼んでいた件で呼び出しを受けたので行ってみた。アテナが見付けて来たのは、手足が無くなった少女達だった。

「これは？」

どの娘も眼に絶望がある。人生を諦めているようだ。まあ、この世界なら仕方ないかもしれないな。

「要望の品。手足を治せばいい。戦乙女達ヴァルキユリアの依り代に使えるから。ほとんどの娘は親にも見離され精神が壊れていて、ほって置いたら死ぬだけだから」

「成る程、確かにこのままだと戦乙女達ヴァルキユリアが使えないからな」

ファイルのように融合させれば多少力は落ちるが、人間と変わらない姿になるし任務に色々便利だ。

「じゃあ、お前達にもう一度自らの身体で自由に動けるようにして

やる。覚悟はいいな？適合率の関係もあるから万全じゃないがな」

「「「「「.....（こく）」」」」

ヴァルキユリア
戦乙女を召喚して彼女達と融合させる。

それから、三日がたった。彼女達の何人かは死んだが半数以上に融合に成功して手足を再生させている。

中には精神が元に戻った子もいる。全体的に身体能力が馬鹿みたいに高いし、カンピオーネの体質も劣化しているが再現している。

「アルカイド様、能力測定終了しました」

執務室で仕事をしているとフィルがやって来た。

「どうかな？」

「忠誠心も問題無いですし、単体による飛行も可能でなおかつ魔法が無詠唱で放て、各技術の習熟度が異常に早いです」

副作用か何かしらはないが、平民だったのに魔法が使えるようになってみるみたいだ。

「後、杖がいりませんね。存在自体が魔法のような存在ですから」

「ありがとうフィル」

「いえ、気にしないでください」

フィルに彼女達の事を頼んだからな。

コンコンとノック

「失礼します」

「来たわよ」

クレスメントのご両親がやって来ました。もちろん、呼んだんだけどね。

ちなみに、執務室はノックだけで誰でも入れる。一々返事するのが面倒だからな。怪しい奴は領地に入った瞬間猫達がマークするから問題無い。排除は戦乙女達ヴァルキユリアが行っている。

ジークフリートには軍隊を任せている。ブレンヒルトには秘薬の生成とアテナと一緒に霊薬の開発を頼んでいる。

「進行状況は？」

「戦艦が2割、空軍が6割、陸軍が3割だ」

「秘薬のストックは問題無いわ。霊薬に関してもアテナ様のお陰でかなり進んだけど、生成になるとまだまだ時間がかかるわ」

霊薬はエリクシールとか生命の水とか言われている奴。世界樹が作りだす膨大な魔力を使って作り出している。

「副作用で平民でも魔法が使えるようになるかもね」

「っー」

ブレンヒルトからとんでも発言ができました！

「始祖が魔法を広めた方法ってエリクシルなんじゃないかしら？」

「有り得そうですね」

「まあ、そっちは任せた。呼んだ本題に入るけど、二人で少女30人を鍛えてくれ」

正確には34人が戦乙女化ヴァルキユリアに成功したけど、4人は政治をまず学ばせるからな。

「こる以上仕事を増やすと？」

「ひっ！」

ファイルが恐怖で震えた！いや、猫やフクロウもだけどさ。わからなくも無いよ？普通の人なら気絶するよう殺気を放っているからね。

「軍の物資とかならこっちでやるし、投げられそうなら部下にでも投げたらいい。後進の成長にもなるしね。秘薬は部下に任せてこっちに専念して欲しい。霊薬はアテナがやるだろうしな」

「わかった」

「ええ。なら、これもお願いね」

「おい」

大量の書類ですか？まじで政治組欲しいな。フクロウ達の情報によるとガリアのジョゼフとトリステインのマザリーニ、ロマリアのヴィットーリオが凄いいみたいだな。三人をこいつらの部下として送り込むか。一人は早急にアテナと俺で仕込む。

「わかった。よろしく頼む」

「ああ」

二人が去った後、俺は竜騎兵に量産したライフルを配備した。これは平民の竜騎兵に持たせるためだ。ワイバーンもアテナが白竜や黒竜に進化させたし充分数が足りている。

「フィル、悪いけどアテナ呼んできて」

「わかりました。後、お茶を入れてきますね」

「頼む」

それから、三人で書類仕事に追われた。でも、紙や米、茶葉の生産に成功したのは嬉しいな。

フィルSide

仕事が終わった後、アテナに手伝うように（前に）言われていたので私は自分の工房に今す。工房には大量のマジックアイテムと作りにかけのアイテムが無造作に置いてあります。私は、マジックアイテムを作るのが趣味なのです。今は魔剣を作っています。

「フィル、開けて」

「アテナ？少し待ってください」

扉を開けると大量の道具を持ったアテナがいた。

「どござ」

「うん」

お茶を出して、一息ついてから話を聞いてみます。

「お兄ちゃんに誕生日プレゼントを作ってあげたいの。今まであげてなかったから……」

「そうなんですか？」

「今まであげるものなんて知らなかったから」

「わかりました。じゃあ、一緒に作りましょう」

「うん」

話を聞くと、この黒い鉱石を使って何かを作るみたいです。

「うん、作業はこれを使う」

「……………これはスキルニル？」

「うん」

スキルニルは古代の魔法人形で、人間の血を元にその人間を外見、性格、能力すべてを完全に複製できる。希少価値も高く高級品なんです。……………堆く（うずたかく）積まれています。

「これを使うの？」

「うん……………死ぬから……………」

「今なんて……………」

「死ぬかも知れないから人形で代用する。私の力は模倣できなかつた」

それは……………神の力まで模倣できるはずありませんよね。

「まあ、いいです」

アテナにもプレゼントをあげないとダメですね。

月日が流れて二ヶ月がたった。全ては順調に進んでいた。しかし、いきなりウェールズ・テューダー……つまり、兄上がやって来た。嫌な予感しかしないぞ？

「どうしますか？一応、応接間に通して起きました」

「仕方ない。会ってくるか……フィルはお茶を頼む」

「はい」

仕事を片付けてから応接間に向かった。

応接間では、ウェールズがお茶を飲みつつ本を読んでいた。応接間にはライトノベルとか書いたのを並べてある。どうしても、時間がかかる場合があるからね。

「やあ、お邪魔しているよ」

「何しに来たんだ？」

「そろそろ貸したメイジ達を返して貰おうと思ったんだよ。後、この本……ヘルシングだっけ？面白いね……特にこの銃がね」

「そうだろ……って、それだけじゃないだろ？」

「ああ。父上が君達の誕生日パーティを開こうと言い出してね。だから、王城に来てくれ」

「いきなり何言ってるんだ？この六年間何もしてこなかったのに」
流石に一歳までは結構来てたけどね。

「父が君達の所にいけなかったのは、僕の母親のせいなんだけどね」

「関係無いな。俺もアテナも父上に興味は無い」

「……それでも、来てくれないかな？」

「まあ、いいや。行くだけ行くな」

まだ、独立する力はないからな。祝ってくれるなら祝って貰えばいいや。

「わかった。君達のメイジのランクは？」

「トライアングルだな」

「その歳でトライアングルとは優秀だな」

「それで、いつ行けばいいんだ？」

「三日後だな」

なら、普通に行くか。守護の盾戦艦イージスでな。

三日後。擬装を行ったイージスでロンディニウムのハヴィラント宮殿についた。当然、王城にある専用の港に止めたぞ。

船員（戦乙女）^{ヴァルキユリア}に見送られて船を降り、案内に従い王の部屋に向かった。

父上、ウェールズ兄上、アテナと三人で、しばらく雑談した後本題に入った。

「それで、なんの用ですか？」

「うむ。お主等に二人に婚約の話しが来て「断る」……アルカイドにはトリスティンのアンリエッタ姫とガリアのイザベラ姫がシャルロット姫だ。「だから」アテナにはゲルマニアの王だ」

話を聞きやがらねえ！

「断るって言ってるだろうが！！」

「何を言っている。これは王族の義務だ」

「私はお兄ちゃん以外に興味ありませんから」

アテナの言う通りだ。多分、皆殺しにするんじゃないか？

「というか、俺とアテナは既に結婚しているぞ」

「えっ？」

「なんだと？」

「ロマリアの司教にお金を払って、始祖に誓ったな」

「そうですね」

あれはアテナが堕ちた後、直ぐにやったな。年齢なんて黄金でこり押しした。光の国とか言われてるけど賄賂次第だからな。

「くっ、勝手な事をしてくれたな……」

「当然だろ。俺とアテナは二人で生きているんだからな」

「なら、アテナはお前の好きにしろ。しかし、お前にはトリスティンかガリアに行ってもらうぞ」

ちっ、これは仕方ないのか？まあ、いざとなればどうとでもなるな。

「まあ、どっちかは好きにさせてもらおうよ」

「むっ」

「後、領地はそのまま頂いていくから。それに、小さな浮島も貰っていい?」

「ふむ……まあ、よい。所詮、デブリだからな」

よし、大量の細々とした土地も浮いているからな。そっちには、使いは今の所無いんだろうな。でも、俺はあるから欲しいんだよな。

「明日のパーティからお前達は王族となるからな。その者に学べ」

紹介されたのはきつそうな眼鏡30歳越えの女性だ。

「私にお任せください」

面倒くさそうだな。まあ、もらうものは貰ったからな。

それから礼儀作法を習っている。

「いいザマスか?ここはこうするザマス」

少しボロボロになっているザマス眼鏡。

「んっ、じつです」

「ああ」

今はダンスの練習をしている。最初はザマス眼鏡が俺に教えようとしていたが、アテナが乱入して俺の相手を奪った。嫉妬かな?フィルとは何やってもこんな事は無かったのにな。

「違います！そうではありません！」

「くだらない」

「こちらの方がいいな」

俺とアテナはザマス眼鏡を無視して、好きに踊る。といってもアテナが教えてくれる神々により精練されたワルツだが。数千年の叡智を蓄えている女神に人間の技術が敵うはずが無い。

それから、ザマス眼鏡は無視してアテナに色々習った。

そしてその晩日付が変わるころ、バルコニーにアテナとフィルに呼びだされた。

「お兄ちゃん」「アルカイド」

「誕生日おめでとう」

二人から渡されたのは、一振りの剣だった。鞘は黒く豪華な作りだし不滅などの様々なルーンが刻まれている。引き抜くと刀身も全て真っ黒でルーンが刻まれ、引き込まれるような美しさがする。さらに、剣の刀身からは死を感じさせる膨大な魔力を発している。

「これは……」

「はい、私がアテナより提供された黒耀石で魔剣を作りました」

「正確には、私の知識にあるエクスカリバーと同じ製法をさらに改

良して作りました」

つまり、アテナとフィルが作りあげた漆黒の聖剣エクスカリバーと言っわけか。しかも、即死効果付きの馬鹿げた魔剣だ。

「ありがとう」

「喜んでもらえてよかったです」

「うん」

「じゃあ、これは俺からだ。おめでとう」

アテナに左右が尖った帽子を渡す。はい、アテナが初登場した時に付けていた帽子だ。勿論、服とセットだがな。特殊繊維でできているしカウンターまで施してある。

「では、私からアテナとアルカイドに指輪をあげます」

二つの指輪をフィルが渡してきた。そして、左手を差し出して来る。

「わかった、ありがとう」

これはフィルに関しても覚悟を決めるしか無いな。アテナに関してはとっくに決めているしな。だって、俺の意思で無理矢理連れて来たんだからな。だから、とっと結婚だけしといた。

「」

二人の左手薬指に指輪を嵌めた。そして、二人が一緒に俺の左手薬

指に指輪を嵌めた。

「必ず幸せにするから、これからよろしくな」

「はい、こちらこそ」

さて、俺達の為にトリスティンやガリアは利用させてもらおうとするか。

五話

三人称 Side

豪華絢爛な誕生会が行われる。その出席者も各国の王族や公爵家などの大貴族だ。

トリステインからは、トリステイン国王、マリアンヌ、アンリエッタ、ヴァリエール公爵、カリーヌ、エレオノール、ルイズが来ている。

ガリアからは、ガリア国王とジョゼフ、シャルル、シャルロット、イザベラが来ている。

ロマリアからは、マザリーニ、カルロが来ている。

ゲルマニアからは、アルブレヒト三世、ツェルプストー公爵、ハルデンベルグ公爵が来ている。

アルビオンからは様々な貴族が新たに王族と認められた双子に取り入るうと集まっている。モード大公、マチルダなどが来ている。

各自が挨拶をしている。

「アンリエッタ、元気そうで何よりだ」

「ウエールズ様！」

キラキラと恋する目を向けるアンリエッタ。しかし、ウエールズのそれは親戚の子供に向ける慈愛のような物だ。

「ウエールズ殿下、御謙遜のようで何よりです」

「トリスティン国王陛下にヴァリエール公爵もお元気なようで安心しました」

このような会話が行われている中、ジョゼフはパーティを抜け出していた。シャルルはそれを追って行く。

ジョゼフが宮殿を歩いている中、目の前を歩く幼い少女を見つけた。その少女はガリア王家の特徴である青く長い髪を赤いリボンで装飾し可愛らしさを出している。マントこそ身に付けていないが、その身に付けている青を基調にした服はローブのようだ。そして、彼女が持つ長い棒状のような物もローブと同じく高価な品のようだ。

「ふむ、どうするか？」

「兄さん、何してるの？」

「シャルルか……」

少し嫌そうな顔をしたジョゼフは、見ていた者を教えてやる。

少女はパーティに運ばれる料理などから、紅茶とお菓子を載せたお盆を片手に持ち来た道を引き返す。他のものも止めはしない。

「彼女は・・・・・・・・まさか、僕らの親族？いやまさか・・・・・・・・」

「

「おい、シャルルディテクトマジックをかけて見る」

「兄さん・・・・・・・・いや、わかった。ディテクトマジック」

表示されたのは、彼女の身につけているローブや杖のような棒状の物、指輪からでる膨大な魔力だ。使われている素材はどれも超高級品に間違いない。

「詳しい効果は何故か判らないけど・・・・・・・・凄いい力だ」

「ふむ、付けてみるか」

「兄さん・・・・・・・・」

シャルルの咎めるような視線をジョゼフは一切気にしない。

「仕方ないな」

「お前も気になるのだろうか」

「それはね」

そして、娘と同じくらいの幼い少女をストーキングする二人は危険人物間違いなしだ。

庭園の休憩所で七歳くらいの美形な少年と可憐な少女がチェスに興じていた。

「ルーク」

「ビショップ」

盤面は少女が優勢のようだ。

「くっ、ならここだ」

「む、流石神殺しカンピオーネ……如何なる状況でも勝利を得る道を見付けますか……三手後に詰みですね」

「勝った」

はつきり言って、ただの遊びにカンピオーネの力を使うなど、明かな力の無駄遣いだ。

「ただいまです」

「お帰り。そして、後ろのは？」

「え？」

「やあ！」

「貴様のせいで見付かったじゃないか」

「兄さんのせいだろ！」

兄弟喧嘩を放置して紅茶を飲む三人。それに気付いた二人は喧嘩を止めて、三人に近付いて行く。

「ゴメンね。その娘の素姓が気になってね」

「青い髪はガリア王家の特徴だからな」

「私にはわかりません」

フィル自身、本当に理解していないようだ。

「眼の色も違うから血が入ってるだけでしょうけど」

「しかし、碧は青とも言うがな。だが、そんな事より一戦しないか？」

ジヨゼフがチェス盤を指差す。

「いいよ」

「じゃあ、君は僕としない？」

「興味無い」

アテナはシャルルの誘いを素っ気なく断り、アルカイドの膝に座り身体を預け本を読みだす。

「……………君はどうだ？」

「そうですね……………」

「やってあげたら？」

アテナの頭の上に顎を乗せてチェスを打つアルカイドがフィルを促す。

「わかりました」

少し、時間が流れてへこんでいるジョゼフ。フィルとシャルルの対決はフィルが劣勢だった。

「あう、もう手がありません……………」

「クイーンを5ー1に」

「おや、相手になってくれるんですね」

アテナが本から眼を反らさずに、フィルに指示を与えていくと見る見る形勢は逆転しフィルの勝利となった。

「フハハハハ、良いぞ！俺をここまで楽しませてくれるとわな！」

「兄さん……………」

「うるさい奴だ」

「あの、もう時間ですよ？」

「」「」「あつ!？」」「」「」

ジヨゼフとシャルルは急いで戻り、アテナとアルカイドは準備を行った。

所変わり、賑わっているパーティー会場。ようやく、出席者も揃いパーティーは本格的に始まるうとしていた。

「この度は余の息子と娘のためにわざわざ集まってくれた事、感謝する。それでは紹介しよう。余が息子アルカイドと余の娘アテナじや」

盛大な拍手と音楽が鳴る中、人々は期待と不安、見定めようとする。

「.....?」

「来ない？」

「どうしたんだ？」

そう、奥から誰も来ない.....いな、一人の青髪の少女が会

場の真ん中に向かい、何か丸い物を投げた。

「なっ！」

皆が慌てて避けると、丸い何かから色とりどりの煙りが出て来た。近衛が杖を取り出そうとした瞬間、ポフィンと言う音と共に煙りは消えた。そして、真ん中に現れた二人の人影。

「はい、種も仕掛けも無い空間転移でございます」

とお辞儀するアルカイド。わざわざシルクハットまで用意すると言う徹底具合だ。しかも、そのシルクハットから次々と猫が出て来て子供達に甘えだす。

「可愛い〜」

「凄い〜」

子供達は惜しみ無い拍手を送る。大人達はいきなり出現した事にドキモを抜かれていた。

「くっ、くくく、やってくれるぜ」

「やっぱり、あの娘達がそうだったんだね」

ジヨゼフとシャルルは直ぐに立ち直ったようだ。

「おや、余り受けて無いようだ」

「お兄ちゃん、私は楽しかったよ」

「ありがとう」

「あははは」

ウェールズは乾いた笑いをした。

「貴様等、何をやっているか！」

かなりご立腹だ。なぜなら異端審問に賭けられても文句言えないからだ。

「何って虚無（嘘）を使った奇術だけど？」

「ふざけ……」

「……虚無だと!?」「……」

会場中に大音量の叫び声が鳴り響いた。

騒然となった会場。嘘だと思っている連中もいるが、囲まれた中いきなり現れた二人。

審議はともかく、二人の圧倒的で引き込まれるような美貌に二人が放つ圧倒的な存在感。さらに、ディテクトマジックにより感じられる膨大な魔力は始祖の再来と信じてしまいそうになる程だ。

「飽きた」

「そうだね」

その言葉と同時に嘘のように一瞬で霧散する存在感や魔力に会場は静まり返った。

「二人共、やり過ぎでは無いですか？」

「フィル、お疲れ様」

「そうかな？」

アルカイドはフィルの頭を撫でてやる。フィルは無表情を綻ばせながら喜ぶ。

「よう、お前等ガリアに来ないか？今なら娘も付けてやるぞ」

「お父様！？」

「狡いぞジョゼフ！それならシャルロットはどうだ！」

差し出されたイザベラとシャルロット。二人は確かに可愛い。

「だが断る！」

「っっ」

「チエスで勝てたらいいぞ」

「やってやる！」

「兄さんはさっきやっただろ！次は僕だ！」

カンピオーネは神を殺してなる存在。神を殺せるのはカンピオーネだけ、その逆もしかり。数億、数千億分の一の確率でただの人が神に勝利する事もある。つまり、彼等は神を倒せと言われているのだ。

「どうせ無駄だから気にしなくていい」

「お二人はこっちで遊びましょう」

「「うん」」

チェス盤を二つ出して、二面打ちをしだすアルカイド。相手がジヨゼフとシャルルだと言うのに一切引いていない。

「これで終わりだ！チェックメイトっ！」

「「ぐはっ！？」もう一回だ！」」

「無駄無駄無駄！」

明らかに使う場所が間違っているし、無駄にかっこよく言っている。

そんな事していると再起動しだした大人達は二人……いや、青い髪のフィルも見ている。

アルカイドは今だ二人を相手にチェスをしているし、アテナはそんなアルカイドの膝の上で実況している。フィルは子供達と遊んでいる。

「おい、虚無と言うのは本当か！」

貴族の一人が思い切って聞いてみたようだ。その事に会場中が聞き耳を立てる。

「嘘」

その言葉に何処か安心する人々。そして、怒りを感じる存在ロミアアなどもまたいる。

「かどつかは貴方達自身が決める事」

次の言葉により、さらに混乱させられる人々。本人達は虚無かどうかという問題をばらまくだけで、否定も肯定もしないと言っているのだ。

「ふ、ふざけるな」

「ふざけていない」

その貴族は姿勢も変えず、こちらに見向きもしないアテナに怒ったようだ。これは、神として受け答えしてくれるだけアテナは寛容なのだ。本来の神にとってただの人間など路傍の石や微生物程度でしか無いのだから。

その貴族は顔を真っ赤にしてアテナに掴みかかろうとした。

「下郎が汚い手で妾に触れるな」

貴族の手がアテナを掴もうとした瞬間、貴族をアテナが絶対零度の視線で一睨みすると、瞬く間に貴族は石となった。これはアテナの

力の一つでメドゥーサと同一視されたために使える石化の力だ。

「おいおい……」

「無詠唱でこれかよ……」

「王族に手をあげたため、処罰いたしました。お騒がせしてすみません。運び出せ」

「はっ！」

悲鳴が上がる前にウエールズが見事に処理して見せた。

「貴方、今の力が本当なら……」

「ああ、カトレアの事をどうにか出来るかも知れん」

「しかし、難しいようですね。あの娘は、あの少女とアルカイド王子以外の人間……家族ですら取るに足らない存在と見ているようですね」

相当怒っているのか、握っていたグラスが粉々になっていた。

「落ち着け、アテナ姫が無理ならアルカイド王子から接触すればいい」

「そうですね。それに、アテナ姫はアルカイド王子にお熱のようです」

「そうなのか？」

「はい。あれは愛している人を見る眼です」

それは的を射ている。というか、アテナの瞳にはアルカイドとフィ
ルしか写っていない。かろうじてウェールズを捉えているかどうか
なのだから。

「しかし、今いくならあつちだな」

「ええ。ルイズ、あそこにアンリエッタ様と一緒に行って遊んでき
なさい」

「わかりました母様！」

まずはフィルから攻略するようだが、トリステインの王族が一番偉
く、次にヴァリエールが偉いと思っているルイズを送るのは間違っ
ているのかも知れない。

そして、時間は流れ解散となった。アルカイドの戦績は4 2 戦4 2
勝だった。

三人称 Side Out

五話（後書き）

さて、何処にいくか悩み中です。

六話

こんばんは、誕生日会から間諜が沢山入って来て困っているアルカイド・シンフォニア・ド・アルビオンだ。まあ、召喚した猫達が見付けて戦乙女達^{ヴァルキュリア}が全て始末しているがな。

あれから、早四ヶ月も立っている。当然、色々言われているが無視している。

「お兄ちゃん、それでどうするの?」

ちなみに、アテナが言っているのは暗殺や引き抜きなどのために密偵を派遣しようと言う話だ。情報収集は猫とフクロウで行けるからな。

「ジークハルトとブレンヒルトに預けていた娘達はもう充分育ったみたいだし、彼女達を密偵として派遣する」

まさか数ヶ月でスクウェアアクラスの魔法とメイジ殺しの技術を物にするとはな。

「内訳はどうしますか?」

「六人五組に編成して、アルビオン、トリスティン、ガリア、ロマリア、ゲルマニアに一組ずつ派遣すればいいと思いますよ。偏在で

五倍になりますから」

フィルの意見がベストだな。アテナも賛成しているしみたいだな。それにしても、このお茶は美味しいな。しかし、お茶を飲みながら決めていいことなのか？

「では、それでいい。下水などの衛生施設も完成したし、稲や麦の栽培も問題無いよな？」

「それに茶葉やお酒も順調。私の力で大きさや栄養、成長速度も五倍にしてあるから」

「……………」

流石、豊饒の女神だな。農作物にすらチートできるとか反則だな。流石、神様。

「じゃあ、他は何かあるか？」

「私は無い」

「私がありますよ。アルカイドが言っていた料理の再現は叶いました。シヨウユにミソ、ミリン、スシスなどの調味料もできましたから」

「マジで！」

「はい。今日の夕食に出ますので、味の確認をお願いします」

「わかった！」

この世界の料理はコッテリしすぎだし、殆どが焼いたりした肉とかだからな。麦が出来たなら、小麦も可能だし、パスタもできる。色々夢が膨れるな！

「子供ですね」

「子供だからな」

「本当に子供なのかな？」

はっ、ははは。まだ俺達は八歳ですよ？子供に決まってるじゃないか。

「マせてますけどね」

「既にいっぱいしてるから今更だよ」

五歳から毎夜エッチばかりしているしな。基本3Pだから激しくなるけど。

「まあ、私は気持ちいいからいい」

「そうですね」

男として嬉しい限りだよな。だって、両手に花だぞ？まあ、無理矢理そうしたと言うのもあるけど、据え膳食わねば……まあ、違うかも知れないけどいいや。気にしない。

「アップルパイが届きました」

「美味しそう」

いつの間にか届けられたアップルパイをフィルが切り分けている。

「いただきます」

「アテナに感謝を」

「えっ？」

「いや、神に感謝をって言うじゃん？ブリミル教だと始祖ブリミルに……って言うけど、神様が目の前にいるんだからな」

「神殺しの魔王が何を言うのですか？」

「そうですね。理論的におかしいと思います」

「確かにそうだな。どちらかと言えば食材に感謝だな」

「はい」

それから、三人でアップルパイを美味しく頂きました。というか、精神力が上がったんだけど、絶対この黄金色の林檎のせいだよな。

更に月日が流れ四年後、12歳となった。

魔法だが、俺達は8歳の内に全属性スクウェアとなったので、スクウェアの最年少レコードを塗り替えた。俺とアテナに関しては虚無との噂も広まってるしな。

次にアークの軍事力だが、竜騎士に火竜や風竜の倍以上の大きさで、上位存在たる闇竜に光竜を用意した。ダイクネスドラゴンドリコン闇竜にはメイジ部隊を搭乗させ、光竜には平民にライフルを装備させた。ちなみに、どちらもブレスを吐くし、闇竜は攻撃よりで、光竜は防御よりだ。

戦艦はナデシコを開発した。といっても、武装はレールガンがメイン装備だがな。グラビティーブラストは土メイジの協力の元、磁力により超高速回転装置、ジャイロのような物を作り出しエンジンにした。風石無くても空を飛べる優れたものだ。こいつを旗艦にして、イージス艦を多数作り防衛艦隊とした。

そして、これが大事だよな。ラピュタに標準装備していたゴーレムみたいなのを造らなくてはいけない。というわけで、ミスリル製のゴーレムを作り上げた。

「どうしようか……」

「明らかな過剰戦力ですね」

「そうなんだよな。そのせいか、間諜が馬鹿みたいに潜入して来ているんだけど、とりあえず殺してるけどさ」

この四年でやり過ぎたのか、アークは元の倍以上の広さになっている。というのも、小さな浮き島などを集めてアークの四方に島を作り出した。それらを巨大な橋で繋いである。しかも、各属性に分け

た島となっている。火は工業区、土は農業区、水は水産区、風は港と発電区だ。

そして、我が領地には列車が走っている。そう、走行列車アハト・アハトがな。ああ、もちろん趣味だぞ。これにより、街では船、長距離移動は列車となる。

「これだけ発展すれば仕方ないでしょう」

「しかも各島に属性石も大量に混ざっているしな」

「異端審問に掛けられても文句言えませんか？」

「くつ、くくく。フィル、連中は虚無かも知れないと思っている俺達には手が出せないよ」

「馬鹿ですね」

「全くだ。さて、エルフはどうなるかな」

「エルフですか？」

「ああ、モード大公がエルフの妻を娶って娘を作っていたそうだが全く良くやるよな？人の事は言えないけど。」

「そつちも気になりますが、ガリアとトリステインから催促が来ていますよ」

「面倒だな、トリステインは貴族共を殺していいならいいんだけど」

どな」

「ダメでしょう」

だよな。ガリアは兄弟対決だろ？めんどくさいわ。

「とというか、アンリエッタも興味無いしな」

「いつそ我等でエルフを滅ぼしますか？」

「いいな。確か蛮族とか言ってたんだっけ？」

「はい」

エルフを支配して兵力化してしまえばかなり使えそうだな。砂漠を生産プラントにしてしまえばいいからな。聖剣……いや、漆黒の神剣を試すにはいいか。ブリミル教が聖戦を発動しても勝てない連中にたった三人で挑むとか楽しそうだな。まあ、戦艦は使うだろうけど……よし、決まりだな。

六話（後書き）

エリア狩りになりそうです

七話（前書き）

色々趣味に走ってます。後、アテナちゃんをちよつと修正。

七話

ハロー、エルフを狩りに行こうと思っているアルカイドだ。だから、エルフの住んでるサハラに行こうとしてるんだが、アルビオンの位置的にトリスティンからガリアを通過して行く事になる。ゲルマニアからも一応行けるが、色々面倒なので放置した。

ついでに、新婚旅行がてら各地を観光するぞ。

移動は場違いの工芸品であるトライクと言われるバイクを手に入れた、改造した戦闘用大型トライクだ。

原型はどこかの量産型兵器だが、土メイジやアテナの手によってエンジンに火石と風石の物に換装してある。馬力が異常に高く、普通の人間がまともに走らせるのは困難を極める代物になった。フロントカウルは走行中に取り外すことができ、内蔵されたグリップを保持して剣として扱える他、機銃を2門装備している。

うむ、ブラッククロツ シューターに出て来たモンスターバイクだ。ゲーム内では時速は360Kmが限界だが、風石を利用して風の膜を作り出してある程度風圧などを緩和出来るようになったし、火石により馬力が馬鹿みたいに上がった上、土石をメインにタイヤを作

り上げた（ゴムは錬金）し、フレーム等はオリハルコンやミスリル、ヒビイロノカネを錬金している。さらに、俺、アテナ、フィル、ジークハルト、ブレンヒルトによる全力の固定化を一日中かけて劣化を無くした。ガソリンやオイルは水石を砕いて液状にした物を変わりに使っている。全て循環型にしたため、魔力（精神力、呪力）を注ぎ込み続ければ無限に走れる。機関銃の弾丸は型容れによる複製を行ってある。（職人の手による鑄掛けは必要だが）打ち出しはレールガンと同じ方法だしな。まあ、このような改造により時速は560Kmまで出るようになった。

というモンスターバイクでトリステインの首都トリスタニアに向け街道を爆走中である。

「お兄様、気持ちいいな」

「ああ」

アテナがめんどくさくなったのか、まつろわぬ状態に戻って来た。まあ、お兄ちゃんからお兄様になったのは許容範囲だ。だって、一時呼び捨てだったからな。いや、いいんだけどこっちのほうが・・・。。そこ、シスコン言うな！前の世界で妹がいなかったんだからいいんだよ！

「つと」

「きゃっ！やっぱり速すぎます！」

はい、三人乗りしてます。前にアテナ、後ろにフィルが抱き着いてる。え？道路交通法違反？ハルケギニアにはそんなの無いし、そもそも時速400Km前後で走行中なわけなんで・・・。。罰金と免停確定だぜ？つと、前方に馬車を発見。

「速く無い。右に行くぞ」

「了解」

「はっ、はい！」

右に身体を一齐に傾けて回避した。因みに、盗賊や亜人などはフロントカウルを使い斬殺している。

「しかし、ナデシコやイージスなら直ぐではないのか？」

「こんな新婚旅行がてらの暇潰しを兼ねた旅行などに軍隊や護衛なんかいるかよ。邪魔なだけだし、アークの防衛力を下げるのも問題だ」

「アルカイド、本音は？」

「部下の前でイチャイチャ出来ないからな」

部下じゃないと気にしないがな。だから、帰りは迎えに来てもらう手筈になっている。

「そうか、確かにそちらの方がいいな」

「だろ？」

「襲われる事は……」

「我等に敵はおらぬ」

「……………ですね。そもそも、最終目的地がエルフのいるサハラで、ぶどう狩りならぬエルフ狩りをしようとしてるんですからね……………ふう」

なんか、フィルから疲れたような吐息が背中に感じるな。

「む、前方に街を発見つけた」

「あゝ確かに……………あれがそうだな。以外に速かったな」

「そりゃ、こんな速度だしてれば速いですよ……………」

そうかな？音速を超えた速度とか出せる権能があるからそんな速く感じないんだが、速度感覚がおかしいだけか。見る見るトリスティンの王都が近付いて来るしな。

「っと、ブレーキと」

ドリフトを決めて門の前に到着。あゝやっぱりバイクは最高だな。

「な、なんだ貴様等は！？」

「おい、着いたぞ降りろよ」

「いえ、身体が震えて……………」

ふむ、フィルには刺激が強すぎたようだな。

「よっと」

「あう／＼／」

抱き着いてるフィル事、ブラック・トライクから降りた。アテナは既に降りている。

「き、貴様等、答えぬか!？」

「ま、亜人か!？」

「お、応援を呼べ!」

おや、包囲されてしまったな。とりあえず、エンジンを切るか。

「平民か？」

「いや、しかしローブを着ているからな。それに杖のような物も持っているぞ」

確かにフィルは濃い青色の線が入った薄い青色のローブを着ている。青い髪に赤いリボンが似合っている。

「フィル、大丈夫か？」

「はい、ありがとうございますアテナ」

「気にしなくて良い。私とフィルの仲だ」

「はい」

アテナは大きめのダブルカフスシャツにセーターを着ている。下はミニスカートにニーソックス……見事な絶対領域が存在している。ちゃんと俺があげた帽子も着けてくれている。まあ、原作通りの格好だな。俺はブラッ ロックシューターのステラが着ていたノーマルの服だ。ただ、伸ばしていた銀の髪のをに総督のような感じがしないでも無い。これでツインテールにすれば総督で、黒髪にしてツインテールにするとステラだ。だからこそしないんだけどな。

「何事だ！」

「それが……………」

ピボグリフ隊が来たようだ。恐らく見回りかな？まあ、いいや。

「ふむ、いい加減目障りだ。そこを退け」

お、いつの間にかアテナが包囲を出ようとしているな。一応トリステインには行くという一報は知らせたのだがな。

「ふざけるな！」

「ならば……………」

「アテナストップ」

この人、言霊じゃなくてメドューサの瞳を使おうとしゃがったぞ。

「わかった」

「ふう……俺達はトリスタニアを観光しに来ただけだ。通してくれないか？」

「断る！そのような怪し来存在を操り、奇つ怪な服を着る物など通すわけには行かぬな。そうだな。その二人があい……はあつ!?!」

「あー、人の女に手を出そうとするとは……トリスタニアの貴族も堕ちたものだな」

アテナとフィルに汚らわし眼を向けて、ふざけたこと言って来たからぶん殴ってみた。

「貴様、よくも!?!」

「我等を侮辱するとは万死に値する!?!」

おー、いっばいだな。ピポグリフ隊の連中も集まって来たしどうしようかな？

「そうか、ならばやってみせよ。妾達に叶うと思っならな」

「!?!」

「止める!?!」

「!?!」

言霊を込めて制止させた。いや、流石に他国ではまずいよな。まあ、二人に危害を加えるなら別だがな。

「あつた。えつと、私達はアルビオンから来た者です。これがアルビオン王家発行の通行許可証です。そして、こちらがトリステイン政府発行の通行許可証です」

「ほ、本物のようだな」

「しかし、ならなせ……」

「いや、順番だろ。それに行きなり包囲されれば潰すのはあたまえだ」

他の人もいるし順番は守らなきゃな。今はプライベートだから特にね。後は、王族として敵意を向けて包囲するのは問答無用で殲滅しても問題無い。これはプライベートだろうがあたまえだ。というか、バイクと俺、アテナの服には一応アルビオン王家の紋章が入ってるんだけどな。

「と言うわけで通させてもらつぞ」

「はい……」

ふ、ほうけてる内に入らせてもらった。実際に何人かは今のうちと中に入ってたからな。俺達も堂々と中に入った。

トリステインの王都トリスタニアは、王城をはじめ白い石造りの

建物が目立つ美しい街だ。王城と貴族の屋敷、下町の間大きな川が流れている。貴族・平民が多数生活しているが、街一番の大通りとされるブルドンネ街でも道幅は5マイルほどしかなく、裏通りのチクトンネ街には多数の酒場や賭博場もあるようだ。

「綺麗だけど狭いですね」

「私は臭くて叶いません」

「それにこれが大通りか？狭すぎだろう」

フィルも表情には出さないがきつそうだ。アテナと俺は死にそうだ。というのも、中世だから仕方ないが排泄物の臭いが凄いのだ。流石に大通りや通り道には無いが、俺やアテナは鼻も効くのでかなりきつい。フィルは少しいがやっぱりきつい。アークは、地下下水や下水を浄化するのも問題無いので空気や臭いは問題無い。

「とりあえず、宿屋で休憩だな」

「そうですね」

「はい。バイクはどうしますか？」

「外部空間にしまっておくか」

四次元空間を作り出す魔法を開発して、指輪のマジックアイテムにしてある。そう、この結婚指輪だ。しかも、魔法発動体としても使える優れ物だ。いや、前々からなんで杖の形をしないといけないかわからなかったよ。出来るとわかって有り難かったよ。

「しかし、風の膜で私達を覆ってないときついとは……」

「まあ、上空から新鮮な空気を取り入れていますから大分しんどいですね」

「まあ、宿屋が決まったらデートに行こう」

「はい」

さて、王宮からアクションあるだろうな。めんどくさくて凄く嫌だな。

八話

予想通りというか、何というか。朝、王宮から任意という名の強制的な迎えが来た。

「あの……出来ればマントを付けて……」

「似合わないから却下だ」

「こ、困ります!」

「知らん」

この服にマントとか無いわ。アテナの服なら許容範囲だが本人も嫌みたいだ。

「わかりました……お連れ様はこちらでお待ちください」

ふむ、フィル一人置いて行くのは不安だな。

「断……大丈夫です……わかった」

心配には変わらないし、猫を置いておくか。

「では、こちらにお越しく下さい」

そして、案内されたのは玉座。ただ、いるのはマザリーニ枢機卿とマリアンヌ王妃。後は適当な貴族達だ。

「あれが……アルビオンの虚無なの……か？」

「しかし、マントを着けていないぞ？」

「だが、見たことも無い服装だな。素材も良さそうだが……」

「ふん、女王陛下の前にあのような格好でくるとは……しかも、頭を下げぬとは無礼な……」

別にトリスティンの王族に会う必要は無かったのに、強制的に連れて来られたしな。

まあ、自国で他国の王族に何かあると国際問題になる可能性もあるしな。だが、俺達に何かあっても一切の責任を追及しないので気にしないよう連絡はしたんだけどな？

そして、マザリーニ枢機卿は頭が痛そうにしている。当然、他国の王族を侮辱したらどうなるかわかってるよな？普通は心の中で言うもんだぜ？

「トリステインに良く来て下さいました。お二人だけでアルビオンからトリステインまで旅をして来るなんて偉いですわね」

「……これは、放置でいいか。トリステインはマザリーニ枢機卿以外興味無いしな。手に入れるために策略は張り巡らすがな。そして、アテナの機嫌が加速度的に悪くなって来てる。」

「はい。お久しぶりですマリアンヌ女王陛下もお変わり無くご健勝のようすで何よりです」

「いえ、私は女王ではありませんよ」

「ということは王位は現在空席なのですか？」

「そうです」

「うわあ、マザリーニ枢機卿は真っ青になっちゃったよ。皆さんはわかるよな？」

『玉座が空位なのは、王国として終わっている。外交的観点からも普通は即座に傀儡でも置くのが普通』

「だよな。ただでさえ年々国力が下がっているトリステインだからな。王がいなければ貴族を好き勝手するだけだし。しかも、空位の理由がマリアンヌ王妃の我が儘と来たもんだ。」

『終わっているな』

「まったくだ。」

「ごめんなさい、今アンリエッタは出ていて……」

話が飛んでる！まあ、スルーしてただけなんだがな。

「いえ、お気になさらず」

「そうですね。アルカイド君、アンリエッタと結婚してトリステインに来ませんか？アルビオン国王には許可を頂いていますしね」

ごめん被る。

「ええ、国王からガリアとトリステインから側室でも構わないので娶れと言われていますね」

「……なっ!?」「……」

ガリアを先にしたのは国力的に当然だ。

「我がトリステインの姫であるアンリエッタ様を側室などと無礼な！」

ああ、貴族共が五月蠅い。普通は外交問題になるが気にしない。どうぞ喧嘩売ってきて下さい、滅ぼしますから。

『石像にすれば五月蠅く無いかな?』

五月蠅くは無くなるが止めてくれ。

『諒解した』

「それなら・・・」「ガリアを選ぶな」・・・なっ、なぜですか！」

「決まっています。トリステインとガリアでは圧倒的に国土と国力の差が存在するからです」

「そんなはずは有りません！」

「「そうだ！我等は負けぬ！」」

『馬鹿ばっか』

電子の妖精さんの有名なお言葉ですね。後、頭抱えているが大丈夫かマザリーニ枢機卿？

「といっても、ガリアの姫も第三になりますけどね。そういう意味で対して変わらないかな」

「それはどういう事ですか？」

「第一后はアテナ、第二后はフィルがいますから。ああ、血を濃くするために父上からは問題無いと言われてますから」

「第二の方は？」

「現状は平民？」

「「ふざけるな!?!」」

割って入って来た貴族が五月蠅いな。トリステインの方がーとかね。

「黙れ！マリアン又様の御前ですぞ！！」

マザリーニ枢機卿がいなくなったトリステインは面白い事になりそ
うだ。

「あ、貴方は本気で平民を后にしているのですか？」

「ええ、もうしました」

「・・・・・・・・」

凄い形相だな。とりあえず、アテナの手を握って落ち着かせよう。

「さて、マザリーニ枢機卿」

「何かな？」

「トリステインはこのままだと、後何年持つかな？」

「それは、すう「いつまでもモツわ！」・・・・・・・・だそうです」

苦労してますな。まじで可哀相。

「約21万アルパン（7万km²）しか無い国土なうえに、優秀な
平民を起用しない事。さらに、税や法律の関係で年々国力が低下し
ていることが分かっています。年々4%〜8%低下していますし、
今年はどうなる事やら。」

「何を馬鹿な事を言っている！」

「そんなはずは無かるう！」

貴族は放置。マザリーニ枢機卿は驚愕しているな。これはアンタが計算したデータだぜ？

「これをどうにかするには改革が必要。あなたとあなたが婚姻でもすれば或いは……」

「ふざけるな！鳥の骨などと！？」

そう、アテナはマザリーニ枢機卿とマリアンヌ王妃が再婚すればどうにかなるかもと言っているのだ。確かにその方法がいいかもしれないな。

「まあ、そういう訳で俺がトリステインの王になるなら貴族の9割は粛正するな」

「……っ!?!」「」

「さて、そろそろ帰らせてもらい「待て」なんですか？」

「何故ここまでの詳しく調べられている！」

チャンス。動転したのか、疲れているのだろうが、ここで言ってしまったな？罨にかけてやろう。

「リリアは元気ですか？それと、おめでとっございます。貴方との子が出来たと報告が来ましたよ」

リリアって言うのは、トリステインに派遣した三人の戦乙女の力を

ヴァルキュリア

持つ文官の一人だ。いつの間にかマザリーニ枢機卿と出来てたみたい。

「……貴様、裏切ったか!」「……」

「待て、違う!」

「では、失礼します」

「兄様、早くフィルと合流しよう」

ああ。種は撒いた。これで変わらなければトリスティンは滅亡する。後は、マザリーニ枢機卿が死なないように護衛を一応付けておくかな。

フィルのいる部屋に戻ったが衛兵がいるぞ？

「貴様、よくもこの私にただではすみせんぞ!」

「襲ってきた貴方達が悪いのです」

部屋の中は嵐が訪れたようにぐちゃぐちゃだ。そして、血を流しながら倒れている兵士達。中には緋色の円錐が床から多数生えていた。

「何事?」

乱れた服装を直していたフィルに聞いてみる。

「あ、アルカイド様っ！」

「どうした？」

いきなり抱き着いて来たぞ？

「この人達が急に襲って来たんです。だから迎撃してしまいました。ごめんなさい」

「いや、気にするな」

「ええ、悪いのはこの害虫ですね。自害しなさい」

アテナがそう言った瞬間、俺達以外が自ら喉や心臓を刺して死んでいった。

「取り敢えず、そのヒヒイロノカネを分解して次に向かうぞ」

「はい」

それから、二時間後にはトリスタニアを後にした。目指すはラグドリアン湖だ。

八話（後書き）

無茶苦茶くさいですが、トリスティンを崩壊させるのはマザリーニ
がいなくなれば簡単じゃね？と言っ事です！そう、オレンジみたく
！

九話

マザリーニSide

やられた……全てあの小僧の計算通りか。

今までの功績と私がロマリアの枢機卿でもあることで極刑は免れたが、国外退去を命じられた。これでは全王に頼まれたトリステインは………終わりだ。貴族の中でまともなのはヴァリエール公爵とグラモン伯爵ぐらいだ。グラモン伯爵は戦費で大変みたいだな。

とりあえず、家に帰ってリリアを問い詰めるか。

私はトリスタニアにある自宅に戻り、目の前にいる美しい少女リリアを問い詰めている。

「それで、あのアルビオンの虚無とはどういう関係だ？」

「アルカイド様は、私達の主ですね」

あっさり認めおつてからに……私は用済みなのか？

「私に近づいたのは情報を得るためか？」

「いいえ。初めに私が貴方に近づいたのは勉強のためです」

「勉強だと？」

「はい。アルカイド様がハルケギニアを調査した結果、ガリアはジョゼフ様、ロマリアはヴィットーリオ様。そして、貴方を含む三名が政治力に富んでいるため、私達が学ぶために派遣されました」

まさかそこまで評価されているとはな。しかし、ガリアのジョゼフだと？魔法が使えぬ……いや、政治に魔力など関係ないな

「お前は……」「云っておきますけど、命令で身体や心を赦した訳ではありませんから。私が貴方を好きになっただけです。いいですね？」……ああ、わかった」

それなら生まれてくる子に救いはあるか。

「それでどうしますか？私はシンフォニアに来る事をオススメします。貴方とこの子のためにも……」

「しかし、先王との約束が……」

「子と亡き先王との約束……どちらを選びますか？」

私にとってどちらも大切だ。あの小僧さえいなければ……いや、不可能だな。小僧がいなければリアにも会えなかったし近い内に限界が来る。

「……しかし……」

「貴方が教えてくれた事ですが、私が貴方に返しましょう。国とはなんですか？」

「国か……国は民だ」

「なら、答えは簡単です。私達の領地に来てトリスティンの民を受け入れてあげればいいのです」

「そうだな。無能な貴族は邪魔にしなければならない。」

「しかし、問題はあるだろう」

「ありますか？」

「ああ。面積の問題はどうするのだ？」

「それは、アルカイド様とアテナ様に私達がサポートして作り上げた空間歪曲の魔法により実際の面積より、数十倍は広いので問題ありません」

「く、空間歪曲の魔法だと！有り得ないぞ！？それは、始祖ブリミルの領域を超えているぞ！？」

「落ち着いて。血糖があがります」

「あっ、ああ」

リリアが注いでくれた紅茶を飲み、一息をいれる。

「ちなみに、始祖ブリミルなんてあの二人にかかれば月と鼈です」

「おい！」

ロマリアの枢機卿の前でそれを云うか！？

「神に力を与えられたブリミルごときが、豊饒と冥府の女神であるアテナ様、神を殺しその力を篡奪した神殺しの魔王たるアルカイド様に叶うはずもないでしょう」

「ぶっ！？」

「何するんですか。気をつけてくださいね？」

「ああ。すまん……」

吹いた紅茶を綺麗に拭いたり、リリアが世話を妬いてくれる。

「って、神に神殺しの魔王だっ！？」

「はい。間違い無く」

それなら、荒れ地だったあの場所を一晩で緑と資源豊かな大地になった奇跡にも納得が出来る。

「そして私は、神界より召喚された戦乙女ヴァルキュリアとこの世界の人間が融合した存在です」

「そうか……もういい。私はシンフォニアに行こう。お前と子供が幸福で、トリステインの民も救えるならもう良い……
・今日は疲れた……」
私がシンフォニアに行かなければ、連中が何をするかわからん。事と次第によってはとんでもない事になるかもしれないからな。

マザリーニSideOut

さて、ラグドリアン湖にやって来たぞ！当然、バイクだから速いし便利。

「綺麗な湖ですね」

「ふむ、折角だから潜ってみようか」

「え？水着なんて無いですよ？」

「裸でいいだろう。行こう兄様」

まあ、三人だけだしいいか。一応、人払いの結果を張っておこうか。

「うううううううううう／＼／＼／」

「ほら」

「きゃっ」

浚っていたフィルの服を剥ぎ取り、裸にさせる。

「どうせ何度も観てるんだから……」

「それでも恥ずかしいのです！？もう……」

ぷくうくと穂を膨らませているフィルを抱えて湖に連れていく。

「兄様。面白い存在がいる」

「へえ」

「ラグドリアン湖には水の精霊がいると聞いた事があります」

水の精霊か面白そうだな。

「行くか」

隣にいる可憐で可愛く綺麗なアテナに声をかける。水のせいか、何時もより神秘的で美しく見える。まさに女神。

「諒解した。潜ろう」

「はい」

三人同時に湖に潜っていった。

ラグドリアン湖の水は透明度が高く、とても綺麗だ。それに、大量の魚が優雅に泳いでいる。ダイビングスポットとしてベストだな。

「綺麗」

「ああ」

「いい気分です」

水の中なので、呼吸と会話ができる特別なマジックアイテムを使っている。

しばらく泳いでいると、湖の底に祭壇を見付けた。

「アメーバ？」

「あれが精霊でしょうか？」

「多分」

祭壇にはアメーバのような存在がいた。

『個なる者よ。我が領域に……神様と神殺しとは珍しい。何か全なる我等に御用ですか？』

ばれてる上に、対応がいいな。しかし、調度いいな。姿はフィルになった。どうやら、俺とアテナには恐れ多いと思っているみたいだな。

「用は一つ。妾達が支配する領域に来て欲しい」

「ここより良い場所を提供しよう」

「水石も沢山あるので水の精霊様も気に入ると思います」

『諒解した。行くに当たって願いがある』

「なんだ？」

『我を眷属とし迎え入れて欲しい。さすれば、永遠の忠誠を誓おう。そして、肉体を用意してくれるならば、盾や剣となる』

水の精霊でなぜか緑髪のなのなの云っている水死体の少……幼女を思い出した。

「いいだろう。ただし、普段は俺のイメージする存在になれ」

『諒解した。これより我は貴方に付き従おう。調度、下らぬ個なる者に飽き飽きしていた所だから調度いい』

話しを聴くと、馬鹿な人間が精霊に身体の一部をもつと寄越せといってきたらしい。だから、無視を決め込んでいたが、やはり五月蠅く、気晴らしがしたい時に俺達が来たようだ。

「ここはどうする？」

『しばらくは分体を置く。引越しの準備をしなくてはならぬからな』

「なら、問題は無いな」

『これから、よろしくなの』

水の精霊が仲間になったか。色々楽しそうになりそうだ。

九話（後書き）

ローゼンメイデンは取られていたからあの娘にしてみました。
そして、マザリーニの引き抜き。アンチばっか読んでたせいか、あの国はダメだと思っっているしまう。そして、マザリーニ可哀相だろ。と云う訳で引き込んでみました。

トリスティン滅亡まで……あと、なんねん？

十話

新たな使い魔静水久を手に入れて、ラグドリアン湖を堪能した俺達は一路、ガリア王国都リュティスに向かっていた。

というのも、ラグドリアン湖で遊んでいたら、南薔薇騎士団を引き連れたジョゼフが竜から降りてきて、俺達を拉致ったんだ。

そして、ガリア王国都リュティス近郊にあるヴェルサルテイル宮殿グラン・トロワに、連れていかれた。

グラン・トロワで歓待を受けた後、俺達はジョゼフの部屋に案内された。中にはシャルルまでいた。この二人って中悪いんじゃないかな？ たか？ そう、報告来てたんだけどな。

「で、何用？ どうせ来る予定だったし、いいけどね」

二人は文通する中だし予定に入っている。メル友ならぬテミ友？ 内容は多種多様で、チェスの譜面を書いて対戦したりしている。

「ああ。用は簡単だ。お前の嫁のフィル嬢についてだ」

「私………ですか？」

「ええ。その紙が気になったので調べてみました」

「うむ。お前から預かった娘が役立った」

「三国に勉強の為に送った三人の内の三一人だな。」

「青い髪はガリア王家の特長でしたね」

「ああ。瞳が違うが間違い無く王家の血を引いている事が判明した。どうやら、過去に駆け落ちして出ていった奴の子孫みたいだ」

「そう………だったんですか………」

「それで、こちらの一つ目の要求としては王家に戻って来て欲しい」

まあ、管理出来ない所に王家の血があると色々こまるよな。特にガリア王家は始祖の血統だからな。

「こちらの見返りは？」

「結婚していても、身分が低ければ面倒だろう。良からぬ事を考える奴もいるかも知れないが、背後にガリアがいるとなれば余程の事が無い限り問題無いだろ？」

「確かに。うつつとうしい連中は黙るか」

陰口叩く連中は表立って仕掛けてこないしな。

「二つ目はシャルロットを娶って欲しい」

「それは、イザベラもだな。こつちの見返りは、十年後になるかもしれないんがガリアを丸々やるっ」

「フィルがガリアの王族に名を連ねるなら、私達とのパイプは出来ますが、未来に不安が残るから全部纏めてしまおうという企みですか」

「ええ。それで僕と兄さんが争わなくて良くなります。娘の未来の為に協力する事が出来ますから」

「アイツが云っていたからな。王や国の上層部に魔法はいらないとな。精々、いるとしたら近衛と將軍くらいだろう？身の安全は護衛に任せれば良いのだからな」

家の子はいい働きしたみたいだな。

「それだと、絶対条件としてアルカイド様はイザベラ様、シャルロット様を娶らないといけないんですね」

本人達の意思は無視だが、その辺は王族に生まれたんだから仕方ないだろう。まあ、調教でもして懐かせるか。それに大国ガリアの後盾はデカイしな。必要かどうかは知らんがな。いや、武力ならいらないだろうけどな。

「さて、ゲームでもするか」

「いいね。トランプでいいかい？」

「問題無い」

「なら、お二方も読んでくれますね」

フィルがイザベラとシャルロットを呼びにでたか。

「しかし、ただ遊ぶだけでは詰まらんな……」

「なら、こうしよう。セバスチャン！」

「ここに」

執事服を来た20前くらいの中性的な女性が入って来た。手のお盆には新品のトランプとボトルにグラス。はい、家が派遣した子です。

「なんでセバスチャン？」

「気に入ってるからです。それ以外は認めません」

「まあ、いいや」

「セバスチャン、悪いが執務室にある案件を持って来てくれ」

「承りました」

嫌な予感がするぞ？

「負けた奴が案件を片付けて行くのか……」

「子供を働かせるのか？」

「お前達は既に領地を経営しているしな。娘に関してはサポートありで構わん」

「ルールは？」

「大富豪だ」

大富豪は、トランプをプレイヤーにすべて配り、手持ちのカードを順番に出して早く手札を無くすことを競うゲームである。一般的に4 - 6人程度でプレイするのに適しているが、7人以上や3人でもプレイ自体は可能である。2人では特殊な2人用ルールを用いることで遊ぶことが可能である。1人ではゲームが成立しない。1ゲームでの順位が次ゲーム開始時の有利不利に影響する点が特徴で、勝者をより有利にするゲーム性から「大富豪」という名称が付いたローカルルール（地方ルール、独自にアレンジされたルール）が数多く存在することも大きな特徴である。ローカルルールにはゲームに変化を付けたり、カード交換を行うといったゲームの性格上から上位のプレイヤーが勝ち続けることを抑制したりする効果がある。

ローカルルールはカード交換無しの、負けた奴が仕事をすると云うことか……あれ？俺達に特は無くないか？負けなければいいんだが。

「ガリア側に特があるだけでは……」

「調味料とポテトチップスでどうだ？」

「諒解した」

調味料の確保は大変だからな。果物とかは豊富なんだけどね。ちなみに、アテナさんはポテトチップスとかスナック菓子が好きみたいだ。こないだ面白半分で製法をあげたら再現して、ガリアで売り出したんだ。すると、大ヒットだよ。濃い味が人気みたいだが。

「お父様、参りました」

「・・・・・・・・」

二人を連れてフィルが帰ってきたので、本格的にスタートした。ちなみに、セバスチャンは給仕をしてくれている。

初めてから五戦程やったんだが、ルール変更が来た。負けた奴じやなく、勝った奴が仕事（時間的余裕から）。負けた奴はセバスチャン特製ジュースを飲まされることになった。

「Aの四枚・・・・・・・・革命で上がりだ」

「「「ちよっ！」「」」

「嘘でしょっ！？私の手札が！」

イザベラの手札が死んだみたいだな。ちなみに革命は四枚同じカードを出すと行える。効果はジョーカーを除くカードの強さが入れ替わる事だ。

「……………3の4枚で……………革命返し……………上がり」

「シャルロット!」

「なら、私がお兄ちゃんの後を継いで、更に革命」

「うう……………」

さて、仕事はなんだ？

「こちらが最後の案件です」

エギンハイムからの依頼で、翼人を排除して欲しいか……………これは楽だな。まあ、ガリア次第だな。

「ジョゼフ義父さん、シャルル義父さん、翼人って貰っていいか?」

「ああ。構わないぞ」

「確かにそちらなら、有効に使えるね。なら、ガリアの方からアプローチしてシンフォニアを紹介しておくよ」

「なら、これで案件は終了だな。次は何を賭けるか……………」

「私はお前達が乗っていたバイクが欲しいな」

「僕はイージス艦」

贅沢だなこいつら！

「私は魔法の指導書が……いえ、何でも無い……」

「……本がいい……」

イザベラとシャルロットは可愛いな。

「ポテトチップス・うす塩一年分」

「場違いな工芸品がいいです」

アテナ、いくら太らないとはいえ……どれくらいのペースで消費するつもりだ？ファイルは研究がしたいのだからな。

「何と言うか、大人二人、自重しろ」

「「知らん」」

「まあ、二人は金だせよ」

「「ああ（うん）」」

それから勝負して、七千万エキューを巻き上げたが、イージス艦三隻、ブラックトライク四機取られてしまった。赤字だな。アテナがポテトチップスで満足しなければ黒字になったんだがな。まさか娘を生贄にして勝ちに来るとは油断した。

「すまなかった」

「僕達が悪かったから……………」

「……………(ぷい)」

まあ、拗ねた娘のご機嫌取りが大変みたいだからいいけどな。

イージス艦やブラックトライクは念話で戦乙女達ヴァルキュリアに伝えておいた。翼人はセバスチャンが交渉に云って、交渉が上手くいけば安全なルートを使ってシンフォニアに行くみたいだ。

ちなみに、シャルロットにはハルヒの漫画を渡しておいた。シャルロットって長門に似てるよな？イザベラは世界樹の枝で出来た腕輪をあげた。

「それで、新婚旅行はいいのだが、何処に行くんだ？」

見送りはジョゼフと、イザベラ、シャルロット。シャルルに仕事を押し付けたみたいだ。

「ちょっとエルフ狩りにサハラまで」

「おい……いや、いい。生きて帰って来い」

「任せてくれ」

エルフがどのぐらいの実力が、マジで楽しみだ。

「気をつけて行ってらっしゃい」

「また、遊んで……」

「ああ」

「二人共、元気で」

各自適当に挨拶して、トライクに乗り、エンジンを入れる。

「……またな（ね）」

三人に見送られ、ガリアを抜けてサハラを目指す。

十一話

フィルSide

始めましてフィル・ド・ガリア（？）です。

一応魔法は使えましたが、平民だったので家名は有りませんでした。こないだグラン・トロワに行った時の帰りに、ガリア王にエリクシールを渡した時、正式になるよう云われましたのでこうなります。

まあ、結婚といっても、実は挙式はして無いので、まだガリアのままで。アルカイド様とアテナ様はしっかりと上げていきますけど。

「さすがサハラ砂漠だ。暇だな」

そう、現在私達はサハラ砂漠をトラックトライクで爆走中です。ええ、誰も俺の前は走らせねえぜ！！のアルター使いのカッコイイお兄さんみたくフルロットで走り続けています。念のために云っておきますが、私はアルカイド様が書いた漫画で読みました。多分、土と風のスクウェアでしょうね。

「確かに。久しぶりに神や神殺しと本気で闘ってみたいな」

「確かに」

「何物騒な事を云ってるんですか！フラグ立ったらどうしてくれるんですか！」

「そうは云うが、私は戦女神だぞ。このままでは鈍ってしまう」

そんな理由で神クラスの戦いをされると迷惑極まり無いです。

「そうだな。いつそ召喚してみないか？」

「有りですね」

「無しです!?!？」

「「残念」」

全く………無理でしょうが、エルフの方々を応援しましょう。少しでも気晴らしになってもらわなければ困ります。

「あつ、人影だ」

「えっ?」

「それに街も見えるな」

私には見えませんが、このお二人が云うなら間違い無いでしょう。

「お兄ちゃん」

「ああ。撃ってきたな。これなら、遠慮はいらんな」

全速力のまま、突き進み、通り抜け様にブレードでエルフであろう人を切断。すると、10メートルものゴーレムが出て来ました。それもブレードで終わりましたけどね。アルカイド様は五回斬ったら、内蔵のマシガンで蹴散らして遊んでいます。

「馬鹿！？蛮族ごときの攻撃で我々のゴーレムが一撃だと！？」

「ひっ、来る……ぎゃあああっ！？」

「死ねえ！！」

「なんとしても止める！？」

「ぐはあっ！？」

「ゲイツっ！？ちくしょう、蛮族め！？」

と、エルフの方々は大変みたいです。なまじ身体能力がいいせいから、回避出来ない速度で迫って来るなんとかブラックトライクが見えるみたいです。可愛そうに……一応、ご冥福をお祈りします。そもそも、私達は蛮族らしいのでその通りにするようです。

「到着」

「「「「「っ！？」」」」」

どつやら、エルフの集落に着いたようですね。確かに建築技術などは高いようね。

「ふむ、囲まれているか」

「当然ですね」

「ば、蛮族がエルフの領域になんのようだ！」

「聖地観光と」「エルフ狩り」

「」「」「ふざけるな!?!?!」

ですよね。普通はそんな理由でこんな砂漠なんて来ませんよね・・・まして、本来なら先住魔法にカウンターまで持っているエルフが相手なんですから。

「ふざけていなが・・・誰が行くかじゃんけんでいいや」

「「はい」」

エルフ達を無視しつつじゃんけんした結果は、私がパーでお二人がチヨキでした。

「な、何をしている!?!」

「戦う順番を決めただけだ。じゃあ、フィルがんばれ」

「私達は見学している」

「ふう………わかりました」

「ふ、ふざけんなっ!？」

エルフ達が様々な魔法を放って来ます。私はその全ての魔法に無詠唱で発動させた対抗属性の魔法をぶつけて相殺しました。

「ファイルは何気に兇悪ですね」

「戦乙女の力でマルチス^{ヴァルキュリア}ペルが使えるからな
空中で空中戦です。翼を展開した私は速いです。」

「虚無まで使えるように改造しましたし」

私は水の力の結晶、水石を取り出し詠唱を開始する。エルフの攻撃は相殺出来ますから。物理攻撃は杖に仕込んだ接続剣で対応します。

「我が身より集え、氷神の槍よ、彼方より来たれ、銀氷の吐息……
・逆巻き、連なり、空に座し集い固まりて、氷桔の塊を形成す、氷の塊は槍陣を成し、白銀の槍へと成る」

多数の水石から水を吸い出し、上空で氷に変換。

「無駄だ!我等にカウンターがある!」

「そ、そくだ、こんな虚仮威し………」

「普通の魔法ならそうでしょう。でも、大容量の物質重量ならどうですか?」

既に上空には全長1500メートルを越す強大な氷が形成されています。

「これで終わりです。ヘイムダル」

「……化け物めえええ!?」「」「」

「私なんて他の二人に比べたらまだまだです」

落ちた氷の塊により、クレーターが発生し、エルフの街は壊滅しましたが問題ありませんね。

「やり過ぎか?」

「カウンターを破る手っ取り早い手段とは思っが………生き残りはいるのか?」

「奴隷にするんですけどね………すいません」

皆殺しでは意味がありませんし、それこそ野蛮です。

「いや、生体反応はあるな。シエルターにでも入っていたんだろう」

「よかった………」

「では、私が捕らえよう」

「頼む」

実は、この中で捕まえるだけなら、アテナは他の追従を許しません。

少しして、アテナがシエルターの上を吹き飛ばして、中に入っていきました。

「終わった」

一分もしないうちにアテナは戻ってきました。

「収穫は？」

「女が14匹、子供が男12匹女29匹だった」

「わかった。聞いての通りだ。回収しておいてくれ」

『諒解。これよりイージス5隻による降下作戦を開始します。石像の回収はお任せください』

「頼む」

どうやら上空に待機していた護衛部隊に回収を頼んだようですね。

「アテナ、次の目的地は分かるか？」

「聞き出しておいた。あちらに真つすぐだ。そこにネフテス国アデイルがあるらしい」

「じゃあ、そこだな」

「いや、その前にも集落はあるみたい」

「なら、次は俺だな。アディールはアテナが好きにしろ」

「感謝する」

と、いうか。これって6000年の快挙ですよ？ ロマリアが聖戦を発動しても、突破できなかったは場所にたった三人で赴き、圧勝しているんですから……成る程、これがチートと云う奴ですね。

実際、ネフテスまでたいした脅威は有りませんでした。ネフテスは女神様の行進です。泣いて喜びますよね？ 崇めている精霊より、真正銘の上位者ですから。

フィルSideOut

十二話

エルフの姫Side

ネフテス国に住まうエルフ達の代表者……老評議会のメンバーは困り果てています。

「このような報告……信じられん……」

「い、偽りであろう！蛮人ごときが我等エルフを敗るなどあってはならぬ!？」

円卓を囲む美しい青年の方々が、届けられた報告について愚かな言い合いをしています。100歳も過ぎてるのに馬鹿ばっかです。

「静まれっ!」

「」「」つ!?!」「」

統領であるテュリユークさんの一言で、騒いでいた議員さん達は静まりました。

言い忘れてましたが、このネフテスの国はアディールが首都です。そして、この国は共和制です。そして、ここにいる皆さんが選ばれた議員です。

「蛮人対策委員長ビターシャル。この報告書にある三人の蛮人による進攻は確かか？」

「はい。この眼で私自身が確認した。しかも、三人の内の一……青い髪の子供が我々エルフの防衛部隊をたった一人で、一発の魔法で壊滅させた」

「馬鹿な！」

「有り得ぬ！」

「そうだぞっ！我等には蛮人にはない至高の精霊魔法もあるのだぞ！それに、カウンターだってあるんだ！」

確か、ハルケギニアの魔法でカウンターを敗る手段は虚無のディスプレイだけでしたね。

「まさか、虚無か？」

青い髪の子供ならガリアの王族ですね。原作ならジョゼフ、ジョゼットですが、原作前ですからガリアにいる現在の虚無はジョゼフですよね？でも、ジョゼフさんがこの時期にサハラに来るはずがありません。

「違うな」

「ならば、どうやってっ!」

「魔法で上空に巨大な氷を物質化し、大質量を持って、カウンターもろとも叩き潰しにきた。」

出鱈目な事をしますね。確かに、上から下に落とすだけならカウンターは効きませんね。魔法で操作された訳でもありませんしね。

「妨害は?」

「蛮人は有り得無いことにマルチキャストによる魔法の弾幕で防いできた」

「それは本当に蛮人か?」

この世界での人の領域を軽く超えていますね。同類でしょうか?とoriaあえず、聞いてみましょう。

「ビターシャルさん……………彼等の目的はなんですか?」

「はい。蛮人の目的は……………」

「どうしました?」

「シャイターンの門の観光と……………」

「……………ふざけるな!」

「私に云うな！ だいたい、既にシャイターンの門は姫様が破壊してくれているのだ。特に問題は無いだろう。問題は……」

シャイターンの門は、私が転生して、7歳くらいの時に完全に破壊しましたから、観光なんて出来ないんですね。

今の私達は、シャイターンの門を完全破壊出来たかどうかを数十年単位での確認作業中で、砂漠から動く事もできませんし、観光目的なら諦めてもらうのがいいかもしれませんね。

「問題はまだあるのですか？」

「はい。シャイターンの門への観光は次いでで、本来の目的は我々エルフを奴隷にするつもりのようなのです」

「……なっ!?!」「……」

『マスター』

私達なら大丈夫です。さすがに奴隷にされるのは許容範囲を超えています。

私を心配してくれているこの子は、私が神様から頂いた転生特典の一つで、私のパートナーの魔導書です。他の特典はハイエルフと神のハーフとして生まれた事。魔力や容姿、精神耐性などやナデシコからマシンチャイルド、CC無しのボソンジャンプ可能など……
・・趣味に注ぎ込みました。

「実際に、後方から現れた空中戦艦に石化された同胞が積み込まれ

ていた」

「ふざけておるな」

「そこまで、蛮人に舐められるは……………」

「徹底抗戦だ」

「うむ。虚無ならば速やかに支配せねばならぬ。しかし、一人だけで防衛部隊がやられたなら、それ相応の準備がいるな」

どちらにしろ、転生者が相手なら勝てないうえに被害は大きいでしょうね。仕方ありません。私達で闘いましょう。

『はい。マスターのお望みのままに……………』

「いえ、必要ありません」

「姫様？」

「私がです」

「……………無茶です！姫様の身に何かあればどうするのですか！？」
「……………皆、一斉にこちらを止めようとしてくれます。ちょっと嬉しいです。」

「いえ、おそらくですが……………相手は私と同じような存在だ
と思います」

「それは……………」

「例え、人数をいくら集めても無駄に被害が増えるだけです。だから、私が行って戦ってきます」

「しかし！」

「私だけでも、皆さんは敵いませんよね？」

「……………」

実際、模擬戦をすると、エルフの精鋭部隊全てを相手にしても、圧勝できますから。

「後、これは姫としての命令ですが、私が負けたら大人しく投降か逃げてくだ……………逃げるのは無理そうですね」

「ええ。高性能な航空艦隊を持っているようですね」

映像を記録するマジックアイテムで取られた映像には、日本の防衛にも使われていた船です。

「……………イージス艦が相手ですからね……………」

「イージス艦ですか？」

「それが敵艦の名前です。性能はガリアが採用している最新鋭艦の数十倍です」

「……………我等の現在戦力では勝てないな」

「だから、投降してください。私は、倒せるなら倒しますが、倒せなかった事を考えて出来る限りの譲歩を引き出しておきます。」

「わかりました。我々は民達をシェルターに避難させておきます」「お願いします」

これで被害は多少押さえられますね。後は交渉しだいです。

エルフの姫 Side Out

十二話（後書き）

転生者二人目はエルフの姫様です。

十三話

アテナがアディール前から、歩いて行軍を開始した。

「あの………なんで歩くんですか？」

「ああ。あのアディールに神か神殺しに類しする存在がいる」

「え？本当ですか？」

フィルは理解していないみたいだ。まあ、この感覚は神や神殺し特有の物だからな。

「妾はアテナ。ゼウスの娘にして、そこを越え行く者。」

妾は謡おう、三位一体を為す女神の歌を。天と地と闇をつなぐ、輪廻の智慧を。

妾は謡おう、貶られた女神の唄を。忌むべき蛇として討たれた女王の嘆きを。

妾は謡おう、引き裂かれた女神の詩を。至高の父に凌辱された慈母の屈辱を。

我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女。されど、かつては命育む地の大母なり！ かつては闇を束ねし冥府の主なり！ かつては天の叡智を知る女王なり！ ここに誓う、アテナは再び古きアテナとならん！」

「本気だな」

「ですね」

16歳くらいに成長したアテナが一步踏み出すと、砂漠が見る見る緑豊かな大地に成長し、萎びて死んでいく。もののけ姫のダイダラボッチみたいだな。

「あつ、エルフの人達です」

フィルの云う通り、エルフの防衛部隊が出て来た。そして、攻撃を開始した。

「な、なぜたつ!?!」

「精霊魔法が発動しない!」

「我が前に立つな」

アテナが手を一降りするだけで、エルフは闇に吞まれ死に絶えた。

「「来た」」

その言葉と同時に、二人の少女が転移して来た。その二人の内一人は銀色っぽい水色の髪をツインテールにした金の瞳を持つドレスのようなワンピースを来た少女。それに寄り添う、長い黒めの紫髪をストレートにした緑の瞳をしたゴシッククロータの格好をした少女。

「馬鹿な………ホシノ・ルリにエセルドレーダだと!」

ルリの方は耳がエルフ耳だけど、やり過ぎだろ！リベル・レギス召喚可能なうえに、ボソソジャンプ可能とかどんだけだよ！？人の事は云えないが……まずい、イージス艦がハッキングを受けるかも知れ無い。

「貴女が……神か神殺しか？」

「エセルドレーダが神の影を召喚出来ます」

「ならば、闘うか？」

エセルドレーダが前に出て、ルリを守る位置取りに移動した。

「出来たら引いていただけませんか？貴女方が云う聖地は完全に破壊しましたので、意味は無いと思いますよ」

「それは出来ぬな」

「ならば、事前交渉をしませんか？転生者同士ですから、まつろわぬ神……女神アテナ」

「む……この世界で妾を知っている者がいるとわな……」

カンピオーネも読んでたのかな？

「どうしますか？」

「交渉なら妾では無いな。兄様……」

「ああ。少し待っていてくれ」

「諒解した」

二人が下がり、俺がルリの前に立つ。ルリは無表情で、エセルドレ
ーダは汚い物でも観るような眼で見詰めてきている。

「初めまして、アルカイド・シンフォニア・ド・アルビオンだ」

「エルフの姫ルリ・ホシノです。ちなみに、これは勝手に決められ
ました」

「そう。元は女性？」

「もちろん、そうです。」

容姿もいいし、これなら問題は無いな。

「さて、戦前交渉といこうか」

「はい。こちらの要求は即時撤退と双方不干渉、捕まえたエルフ達
の引き渡しです。貴方達が行っているのは侵略戦争………犯
罪です」

全くもって、その通りだ。ただし、それは元の世界。それも日本に
だけ通用するんだけどな。

「犯罪か………エルフをどうこうすることにロマリア、ガリ
ア、トリステイン、ゲルマニア、アルビオンは文句を言わない。ロ

バ・アル・カリイエも文句は言わないぞ？」

「それは侵略者の意見です。我々は……いえ、意味が無いですね」

「ああ。後、その要求は却下だ」

エセルドレーダが殺気を放って来る。それに反応してアテナも戦闘体勢を取っている。

「こちらの要求は、無条件降伏し、全てのエルフを引き渡す事だ。当然、お前も入っている」

「貴様つ「エセルドレーダ」マスター……」

即座にルリが止めに入ったか。

「こちらもそのような、要求は受け入れられません」

「では、鬪って決めるか？」

「はい。ただし、賭けをしましょう」

「ふん、賭けの内容次第だな？」

内容次第で受けていいな。欲しいのは色々出来たしな。まずは、この無表情な二人をぐちゃぐちゃにして手に入れたい。

それにしても、魔王の考えに染まって来てるな。

「まず、私達が勝った場合は先に云った即時撤退を除く条件を呑んでもらいます」

「当然だな」

「私達が負けた場合は、エルフの技術を引き渡しますからエルフを奴隷にするのは勘弁していただけませんか？」

「却下だ。それでは、こちらの条件が悪すぎるだろ」

もちろん、理解しているだろうな。

「はい。ですから、そちらの要求をお願いします」

「エルフを奴隷から外すに、値する要求か……」

さて、どうする？この二人を虐めるには……これだな。

「まず、一つ目はルリが俺の奴隷になる事。これはエルフ達の変わりをしてもらわねばならないんだから、当然だろ？」

「マスター、駄目ですっ！」

「いいのエセルドレーダ。負けなければいいだけだから。エセルドレーダなら勝てるでしょ？」

「はい……必ず」

さすが、エセルドレーダだ。忠犬ぶりが凄いな。

「さて、二つ目だが……その前に、勝った場合は現在捕まえているエルフ全ては帰さないからな。既に本国に送ってある」

「………わかりました」

王の命令なら仕方ないと思ったみたいだ。少し、涙目になっているし、人体実験とか拷問を想像したんだろうな。箱入り娘みたいだし、色々できそうだな。

「改めて二つ目だが、エセルドレーダ………ナコト写本のマスター権限を頂こうか」

「「なっ!?!」」

「ふざけないでください!」

「誰が貴様などを………マスターとするか………」

ふふ、ふははは! 凄くいい表情だ。

「なんだ、お前達にとって、エルフの価値がその程度なのか?」

「それは………」

「今まで世話になったエルフに、自分の契約した魔導書が大事だから、貴方達を見捨てますっていうの?」

あ、俺は見捨てるな。アテナ達の方が大事だからな。

「マスター………」

「くっ、わかりました。貴方達が勝てばエセルドレーダ……..
ナコト写本のマスター権限を貴方に譲ります」

「ま、マスター……..」

「ごめんね。エセルドレーダ」

「いえ……..勝てばよろしいのです」

掛かったな。エセルドレーダの中に、自分よりエルフ達を優先する
という不安も出来たし、いいだろう。

「さて、闘いを初めようか」

「その前に場所を移動しましょう。ここでは全力が出せません」

「いいだろう。何処にするんだ？」

「世界を作り変えます。やるよエセルドレーダ」

「イエス、マイマスター」

改変してしまうのか。

「其れはまるで御伽噺の様に

眠りをゆるりと蝕む淡き夢

夜明けと共に消ゆる儚き夢

されど、さの玩具の様な宝の輝きを我等は信仰し、聖約を護る

我は闇、重き枷となりて路を奪う、死の漆黒

我は光、眸を灼く己を灼く世界を灼く熾烈と憎悪、憎しみは甘く
重く 我を蝕む

其れは悪
其れは享受

埋葬の華に誓って、我は世界を紡ぐ者なり」「

詠唱が終わると同時に、世界は変革した。場所は二つある月の二つ
のようだな。

「では、行きましょう」

「フィルは残っていてくれ」

「諒解です」

フィルだと、死んじゃうからな。ここからは完全な人外の世界だ。

「では、行きます………ジャンプ」

その言葉と同時に、月へと転移した。

着いた月で、互いに二人ずつの対峙。条件を確認し、制約のマジ
ックアイテムを使い、絶対に厳守させられるようになる。

「行くよ、エセルドレーダ」

「イエス、マスター」

「リベル・レギス！」

500Mもの巨大な存在を召喚し融合した。

「まともな力じゃ装甲は貫けない。最初から全力で行くぞ」

「諒解した。では、行きましようか」

ルリ達は天狼星の弓を装備し、アテナは黒耀石の弓、俺は漆黒の神剣を構える。二人とも権能を使用して準備を行う。

「行きます」

「こい」

天狼星の弓から、魔力の巨大な矢が次々と放たれる。それをアテナが小さな矢でその全てを粉碎して行く。

『『化け物………』』

「純粹な神たる妾を舐めるな」

いや、普通は有り得ないからな。それに、事前の揺さぶりが効いたのか、リベル・レギスは力が不安定だな。

「断ち切れ！！！！」

アテナに弾膜を任せて、接近して攻撃を仕掛ける。

『マスターまずいですっ！』

『くっ、ジャ「遅い」しくじりました』

漆黒を纏った神剣で、天狼星の弓を断ち切り、切り替えし様にリベル・レギスの腕を切断する。神剣は概念そのものを殺すから、ありとあらゆる装甲が無意味な上、漆黒を纏った剣は概念を殺す力で距離すら殺す。つまり、一時的にリベル・レギスの大きさに剣を変更したように断ち切れる。

『反則過ぎます……』

『ハイパーボリア・ゼロドライブ』

魔力によって絶対零度の炎を右手に纏わせた手刀をしてくる。これは、単なる絶対零度ではなく負の無限熱量を持っている。

「ちっ」

距離を壊して、下がる。そこにアテナが大量の矢を放って来る。もう一人がりベル・レギスの脚などの間接を石化させていく。アテナもまじチートだな。

『負けませんっ！』

ン・カイの闇で作りに出した重力弾で、アテナの矢を迎撃していく。なおかつ、黄金の剣を取り出して攻撃して来る。無論、月はガンガンと大地が破壊されていていつている。

「重力弾がすごい、なっ！」

『潰れて下さい!』 『潰れる』

黄金の剣をエクスカリバーで受け止める。大地にクレーターも出来るがなんとか耐えられる。

『ジャンプ』

「くっ、くそ」

いきなり背後に現れたり、黄金の剣を振りながら横に現れたのを剣を縦にして防ぐ。

防いでいる剣を主軸にして、身体を回転させ黄金の剣を飛び超えてリベル・レギスの腕を叩き切る。

『くっ』

「剣術は素人だな」

『うっ、うるしゃいっうるしゃいっ』

「シヤナになっているぞ?」

弓と魔法は的確なんだが……こっちには神がいるからな。

「演算能力は素晴らしいですが、それだけです」「闇はこっやって使うのです」

アテナの闇ガン・カイの闇を飲み込んで喰らっていく。

「これで終わりだな」

リベル・レギスの上空に転移して、神剣を腰に構える。

「真名解放、約束された勝利の剣エクスカリバー！！！！！」

漆黒の闇が剣から溢れ出して刃を形成し、リベル・レギスを一刀両断した。勿論、コクピットの場所は理解しているので、二人は無事のはずだ……多分。

「兄様、何か落ちてきたぞ」

「え？これは本のページ？」

リベル・レギスが解けて本のページになり、空から降って来ている。

「これは、まずい……急いで集めろっ！？」

「「諒解した」」

それから、ナコト写本のページを全てを回収して、全壊しかけの月を後にした。俺も転移は普通に来るからな。

十四話

勝利した俺は、ルリとエセルドレーダを引きずって、ルリの部屋に俺は向かった。後処理はアテナとフィルに任せただ。文字通りの神脳チートのアテナと半チートのフィルだから問題は無い。というか、原作より相当発展しているし、ティガーとかの戦車やエステバリスっぽい何かがあったと連絡が来た。エステバリスは未完成らしいけどな。

部屋に着いた俺は、ルリから契約により、エセルドレーダを奪い取る。

拘束したルリの目の前で、泣き叫びながら呪詛を吐くエセルドレーダを徹底的に犯しまくってから、血を吞ませて契約を行う。契約によりルリの権限は無くなってし、簡単だ。まあ、エセルドレーダは俺を殺す気で精神攻撃をして来たので、本来なら死ぬんだよな。頑張って自力だけで耐えたんだが、普通の状態でない、ナコト写本の精霊たるエセルドレーダ本人に拒否されている状態なので、ぶっちゃけ無理だ。契約できそうになったら最初っからという無限ループ……やってらんないよな？

「誰が、貴方なん、かとお、契約しますかっ、私の、マスターは、一人、だけ……」

頑張っって抗うエセルドレーダには悪いけど、容赦する気は無いんだよね。

「なら、ルリを殺すぞ？」

「っ、姫様……………」

「おいたわしや……………」

「おのれ、蛮族め……………」

「不甲斐無い我等をお許してください……………」

「精霊様、どうか我等をお救いください……………」

などなど、云われているが、エルフ達は共通して、こちらに殺意や憎悪を向けて来る。それもそのはずで、俺に連れられたルリとエセルドレーダは首輪が嵌められ、服はボロボロに破かれ、身体に着いた粘液からも、何をされたのか一目瞭然だ。エセルドレーダは契約により存在が書き変わり、俺を最優先するようになったので、背後に控えている。ルリは身体の一部をなんとか隠しているが、瞳は虚ろで光がほとんど書き無い。

「ネフテスはこれより我が領地となる。」

「ふざけるなっ！」

「誰が蛮族な……………」

叫んでいたエルフの上半身が、エセルドレーダの放ったン・カイの闇により、吹き飛んだ。

「マスターへの愚弄は赦さない」

「そ、そんなエセルドレーダ様……………」

「何故ですか！貴女様はルリ様の契約精霊では無いのですか！」

「それは死ぬ前の私。今の私のマスターはアルカイド様。だから、全てはマスターのために……………」

マスターテリオンに付き従うように、忠犬ぶりを発揮するエセルドレーダの頭を撫でてやる。

「……………」

尻尾をバタバタ振っているエセルドレーダを幻視出来るほどの喜びようだ。

「理解したか？貴様等エルフは俺に従うしか無いのだ」

「ふざけんなっ！」

「そうだっ！」

「姫様を救い出すんだ！！」

若いエルフ達が……………いや、みんな姿は若いんだけど……………
…戦う準備をさせた。

「や、止めて下さい！」

「ひ、姫様」

「良いのです。私が奴隷になる代わりに、皆さんが奴隷にされ殺さ

れる事が無いよう契約しました」

「姫様………」

泣いてる奴もいるな。それからも、電子の妖精………こつちじゃ、雷神の妖精か。とりあえず、ルリの説得は続く。

「だから、皆さんは私達の事は気にせず生活してください。これは守れなかった私の責任なのですから………ぐすっ」

最後に泣いたらだいなしだろう。馬鹿だな………ほら、来た。

「ひ、姫様だけに責任を取らずな！」

「そうだ、我等エルフが蛮族に屈するなど有り得ぬ！」

その場に集まった半分ほどのエルフが、ルリを救い出そうと精霊魔法を使おうとした。

「エセルドレーダ、やれ」

「イエス、マイマスター」

「ただし、女は生かせ」

「………（こく）」

エセルドレーダが小型化した天狼星の弓を召喚し、黄金色の矢を放つ。その一本の矢は途中で多数にバラけ、目標に向かった。

到着していた兵士が、泣き叫んでいるエルフの女性に、治療しながら猿轡を噛まし拘束して、イージス艦に連れていく。

「さて、貴様等が逆らわなければ今まで以上の生活を保証してやる。これは契約のためだから安心しろ。ただし、逆らったり、犯罪を犯せば死刑か奴隷行きだ。いいな？」

ルリが虚ろな目をして泣いているが、今は放置。いや、うるさいので、足を口に入れて泣き声を止めさせる。

「……………（泣く）」

「よろしい。これより君達は我が民だ。住所登録などの個人情報も登録するから議会場に行き、住民票を貰って来るように。後、俺達とガリアを蛮族だと思わないように……………以上」

それから、兵に指示を出して帰宅して、エセルドレーダにはご褒美をあげて、ルリはちよ……………げふん、躄を行う。丁度、いい感じに、エルフの反乱分子と一緒に、ルリの精神が壊れたから都合がいいからだ。

アテナSide

兄様があの二人で楽しんでる間に、法改正を行い、評議会の利権や権限も全て掌握し解体した。全ては兄様や私達に従うようにして、ネフテス領とした。フィルと協力してここまでで二日。

基本的にネフテス領は、評議会から引き抜いたビターシャルとテュリユークに基本的に任せる。領主は名前だけルリにしてある。あの小娘はエルフにとって、生き神みたいな存在だから。

さて、妾はビターシャルを連れてアディール近郊に来ている。

「さて、報告にあつた件だが」

「はい。我々エルフは精霊魔法により、サハラでの生活をこなしていました。姫様の発明品のお陰で多少はましですが、このたびエルフの人口が急激に減つたため……」

今、結構な数のエルフが処理されましたからね。

「よろしい。兄様からの命令もあります。妾の力で解決してあげます。欲しいのは自然ですね？」

「御意」

ビターシャルは膝を付き、臣下の礼を取る。この者とテュリユークは妾が精霊の上位存在である事に、なんとなくでも気付いているようです。

「巻き込まれたく無いなら、空中にいなさい。」

「はっ！」

すぐにフライトで空を飛んだビターシャルを無視して、大地に呪力を流す。

「どうやら、龍脈が死んでいますね」

呪力を通し、歴史を診ると、聖地にあったシャイターンの門が龍脈の力を喰らい砂漠化の原因である、龍脈を殺したようです。そこから出て来たブリミルが悪魔と云われるのは間違いありません。

「既にシャイターンの門は存在しない。なら、問題は無い……
・再生させましょう」

指先を噛み、血を大地に流す。それと同時に死々た龍脈に呪力を注ぎ込みながら、権能を使い新たな龍脈に生まれ変わらせる。

そして、大地には祝福を授ける。次に、龍脈の上に神聖な湖を作り出す。

「静水久」

「喚ばれて飛び出てじゃじゃじゃ〜んなの」

「……………」

「……………」

「スルーはつらいなの」

湖の水を通して、転移して来た水の精霊静水久。

「だから、スルーはつらいなの」

「やらなければいいのに。まあ、いい……ここを貴女にあげるから、代わりに木々や植物の種とかを取ってきて」

「やれと電波を受信しただけ……なの。まあ、諒解なの」

それから数分もしないうちに、湖に切られた木々や種……世界樹の枝まで持って来た静水久。

「世界樹を傷付けるなら事前連絡をお願い」

「アフターケアはしておいたなの」

「なら、いい」

「あれが水の精霊様だと……orz」

空で嘆いているのは無視して作業に入る。

「静水久、手伝ってくれ」

「諒解なの」

まずは湖の真ん中に世界樹の枝をさして、二人（柱）で祝福を授け、成長させる。数百メートルの巨大な木ユグドラシルを作り出した。それにともない、湖も広げる。

「マナの放出に龍脈の気が流れ込んできて、どんどん力が上がって
いくなの〜」

「土地神みたいな者だから……次はアディールの周りを緑
豊かにする」

「任せるなの！」

私達は作業を開始した。

数時間後、ネフテス領アディールはその姿を一変させていた。

「やり過ぎた」

「気にしたら負けなの」

「素晴らしいお力です」

アディール近郊はジャングルになっていた。それだけでなく、アディールの中も緑豊かになり、建物には木々が絡み付き、兄様が書いていた本に出て来るエルフの住まいへと変貌していた。

「エルフの人や精霊も喜んでるし、別にいいと思うの」

実際に、ユグドラシルから降り注ぐマナの光の球により、力を得ていく精霊は飛び回り、幻想的な世界を作り出している。

「なら、構いませんね」

「じゃあ、進軍を開始する……なの!!」

いきなり邪悪な笑みを浮かべた静水久は、川を作り出し、砂漠に水を供給していく。

「ネフテス……いえ、兄様のために砂漠を創り変えます」
それから、私達はネフテス中を緑溢れる豊饒の大地としました。街の近くには軍事施設も作りながらなので、時間もかかりますが、どうせ兄様は二人でお楽しみ中なので、特に問題はありません。ルリを早く取り込めれば、統治が楽になりますから。

十四話（後書き）

これでエルフ編終了かな？

静水久は大精霊クラスに強化されましたし、ネフテスは落ちた。ブリミル教には教えませんけどね。

最後に幼女魔王の方もよろしくです。

十五話

エルフの国ネフテスに加え、ルリとエセルドレーダを手に入れた俺達はアテナを残してシンフォニアに帰還した。アテナはネフテス全土を豊饒の大地にするために、残った。

帰還してから一週間が経過したので現在の報告。

ネフテスの開発はアテナ任せなので、俺はルリのちよ……こほん、賤を行う。それと同時にエルフ達の編成した。

奴隷として拉致して来たエルフは、解呪を行い石像から元の動ける身体に戻す。反乱に参加したエルフの女は死なないようにしたり、再生させた。その二つのグループは、服従の首輪（逆らう事が出来ない絶対服従の呪法がかけてある。しかも便利な爆弾付き）を付けて完全な奴隷とした。

拉致組は青い首輪を付けて領地内で働く技術開発部や商店の売り子など……その技術と容姿を役立てる場所に派遣した。ちなみに、子供は城で働かせる。女の子はメイド、男は軍人として徹底的に教育して働かせる。

反乱組は赤い首輪をつけて一部は娼婦として娼館に送りこんだ。一部は領地に貢献している者達に褒美として与えた。残りは戦闘訓練の相手役……当然、罰ゲーム有りや軍人と竜達の世話役として働かせた。ぶつちやけ、汗や硝煙の臭いとかが凄いのでなり手がなかった。ここでは平民も貴族も関係ないから特にな。後、綺麗処がいるから兵は訓練に頑張るからな。

後、青と赤組の中で一部……綺麗なエルフが多い中でも更に綺麗や可愛い女性は城に入れて働かせる。主な仕事はルリ世話と護衛だ。

「ルリに関してはルリの精神安定の為だから仕方ない」

精神が壊れたら、せつかくのルリが使い物にならなくな……るから……ならないな。神からの特典でナコト写本のサンチエック（精神攻撃）を耐えれたんだから大丈夫だな。まあ、人質の意味もあるから問題は無いかな。

「マスター」

「なんだ？」

エセルドレーダが執務室に入って来た。そして、俺の椅子の前でひざまずきながらしな垂れかかり、頭を乗せて来る。

「配置完了しました。ロマリアの生ゴミが来ても問題有りません。マスターの領地より生きて帰れる事は無いでしょう」

「ありがとうエセルドレーダ」

「はい……」

エセルドレーダのきめ細かい柔らかな黒髪を撫でてやると、気持ち良さそうにすりすり甘えてくる。

調教の結果、完全に俺のエセルドレーダになった。マスターテリオンに仕えるように忠犬ぶりを発揮している。

だから、空中や領地内を守護している戦乙女ヴァルキュリアの統轄権限を与えてみ

たんだが、内外に完璧な防衛体制を取っている。

「しかも、通常の防衛部隊の穴を埋めているな」

「はい。通常部隊はあくまで警邏や訓練部隊ですから」

「だよな。部隊が編成されてから時間がたっていないから熟練度が全然だよな」

「そもそも、あれは防衛では無く殲滅部隊だと思うぞ」

「む………」

「いらっしやいマザリーニ枢機卿」

新たに入って来た人のせいで、エセルドレーダの機嫌が悪くなった。まあ、頭を撫でていると大丈夫みたいだがな。

「こちらでの生活はどうですか？」

「ああ。エルフがいることがブリミル教徒としてあれだが、特に問題な無い。後、薬をありがとう」

「お気になさらず。勉強の方はどうですか？」

薬は若返りをあげた。だから、マザリーニ枢機卿はかなり若返っている。

勉強は数世代先の法律学など政治学を学んでいた。いた。

「問題無く進んでいる。取りあえず、仕事は終わらせた」

「ん……確かに問題有りません」

確かに素晴らしいくらいの政務能力だ。報告書と法の改正案などの意見書がある。

「この法律は素晴らしいが、この世界に適していないな」

「マスターの作った法律がダメだと云うのですか？」

「違う。素晴らしい出来であるのは間違い無いが、民が付いて来れぬ」

「なら、民がマスターに合わせれば良いのです」

「落ち着けエセルドレーダ」

「んんっ!？」

エセルドレーダの口に指を突っ込んで黙らせる。まあ、すぐに口に入れた指を舐めたした。

「やっぱり、付いてこれない？」

「ああ。少しずつ慣らしていくしか無いと思う」

「なら、そちらはよろしくお願いします。エルフの事も最終的にはお願いしますよ」

「分かった。それと、ロマリアから派遣神官だが、調べた所名前は

リュミエールだった。それ以外は一切不明だった」

ロマリアのリュミエール……閃光か。

「あく多分、そいつは問題無いな。」

「そうか、リリアみたいな存在か？」

「そうだ。だから、ついて来た他の司祭は処分してしまおう」

「好きにしる。私は戻って勉強しよう」

「では、またよろしく」

出て行ったマザリーニを見送り、エセルドレーダから指を抜く。

「はあ、はあ、マスター………//」

「あれくらいなら別に構わないからな？」

「イエス、マイマスター………しかし、あの人はロマリアの人間では？」

「大丈夫。彼は違うからな」

「はい………んっ」

それから、ルリの元に向かった。

ルリは現在、静水久と共にいる。しかし、なんだこれは？

「喰らえ……なの!？」

数百トンの水を圧縮して創られた水の槍が多数、ルリに向かって放たれた。

「させません」

ルリは黄金色に輝く雷の槍を造りだし、これを迎撃していく。

「くつくく、純水だから雷は通さない……なの」

「知っています。なら、技術と力で押せばいいだけです」

「……………エルフごときが私を嘗めるとは……………いいどきよう……………なの」

「行って下さい(行く……………なの)」

互いの槍がぶつかり合い、巨大な魔力が辺りに撒き散らかせる。二人共一切動かずに、お互いがチエスでも打つように敵の槍を排除していく。

「というか、ルリにこんな能力あったんだな」

「イエス、マスター。ルリには元から精霊を超える雷を操る能力を持っています」

マシンチャイルドとルリのハッキング能力を雷で現したのか。というか、こっちのほうが強く無いルリちゃんよ？

「聖なる神の雷インディグネーションジャッチメント！！！！！」

ティルズかよ！

「むむ、やる……………なの！メールシュトローム……………なの！！！！！」

空中で水の奔流と神の雷がぶつかり合い、島を揺らす。

「というか、島が落ちるぞ……………」

ルリはディストーションフィールドを展開して、空中に止まっている。静水久も空中に浮いて海から無尽蔵に水を供給している。

「マスター、止めますか？」

「ああ。行くぞエセルドレーダ」

「イエス、マイマスター」

エセルドレーダと融合して、天狼星の弓（人サイズ）を取り出して弓を引いた。

放たれた矢は二本に別れてルリと静水久に中たった。

「「あぐっ！」」

矢に刺さった二人を回収……………しようと思ったが必要無かつ

た。ルリは中たった瞬間にボソソジャンプを行い矢をどこかの空間に廃棄。静水久は瞬時に再生して来た。

「で、お前等は何をやってるんだ？」

「それは……………いきなり襲われて」

「主が……………悪いなの」

「む……………」

エセルドレーダは何とか止まったな。にしても、俺が悪い？なんだけだ？

「理由は？」

「個にして全、全にして個たる妾の姿をこのようにしておきながら……………」

姿がくずれアメーバ上になって、怒りの感情を現して来た。

「何故、私を抱かない……………何故、思う存分、私を犯さないなのっ！この小娘は犯しておきながら……………赦さない……………なの」

そして、直ぐに静水久となり、文句を言ってきた。

「嫉妬かよ（ですか）！！」「凄く理解出来ませぬ。マスターの寵愛は何より優先される」

「好きで犯されている訳じゃないのに……嫉妬されて襲うなんて……それに本気で応戦した私……ふふ、馬鹿ばっかです」

「あゝ静水久、分かったから今日の……いや、もう仕事が終わっているから……よし、今からするぞ静水久。ついでに、ルリとエセルドレーダも来い。静水久はファイルを呼んできて」

「諒解……なの」

「……はい……ぐすつ……」

「マスター、可愛がってください」

三者の内二人は喜び、一人は悲しんだ。
それから、寝室に戻った俺は5Pを楽しんだ。

十五話（後書き）

ルリは無印のちっさい方。

静水久はおまもりひまりの静水久です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7171w/>

魔王と神と天空の城

2011年11月9日23時17分発行